

パノラマ島綺譚

江戸川乱歩

青空文庫

同じM県に住んでいる人でも、多くは気づかないでいるかも知れません。I湾が太平洋へ出ようとする、S郡の南端に、外の島々から飛び離れて、丁度緑色の 饅頭まんじゅうをふせた様な、直径二里足らずの小島が浮んでいるのです。今では無人島にも等しく、附近の漁師共しが時々気まぐれに上陸して見る位で、殆ど顧る者もありません。殊ことにそれは、ある岬の突端とつばなの荒海に孤立していて、余程の風なぎでもなければ、小さな漁船などでは第一近づくのも危険ですし、又危険を冒おかしてまで近づく程の場所でもないのです。所の人は俗に沖おきしまの島と呼んでいます、いつの頃からか、島全体が、M県随一の富豪であるT市の菰田こもた家の所有になっていて、以前は同家に属する漁師達の内、物好きな連中が小屋を建てて住まったり、網干し場、物置きなどに使っていたこともあるのですが、数年以前それがすっかり、取払われ、俄にわかにその島の上に不思議な作業が始はじまったのです。何十人という人夫土工あるい或は庭師などの群が、別仕立てのモーター船に乗って、日毎ひごとに島の上あつまに集って来ました。どこから持って来るのか、様々の形をした巨岩や、樹木や、鉄骨や、木材や、数知れぬセ

メント樽^{だる}などが、島へ島へと運ばれました。そして、人里離れた荒海の上に、目的の知れぬ土木事業とも、庭作りともつかぬ工作が始まったのです。

沖の島の属する郡には、政府の鉄道は勿論^{もちろん}私設の軽便^{けいべん}鉄道や、当時は乗合自動車さえ通つていず、殊に島に面した海岸は、百戸に充たぬ貧弱な漁村がチラホラ点在しているばかりで、その間^{あいだ}々々には人も通わぬ断崖がそそり立っていて、謂^いわば文明から切り離された、まるで辺鄙^{へんび}な所だものですから、その様な風変りな大作業が始つても、その噂^{うわさ}は村から村へと伝わる丈^だで、遠くに行くに従つて、いつしかお伽^{とぎばなし}噺^{ばなし}の様なものになつて了^{しま}い、仮令^{たとえ}附近の都会などに、それが聞えても、高^{たか}々々地方新聞の三面を賑^{にぎ}わす程のことで済んで了^{しま}いましたが、若^もしこれが都近くに起つた出来事だつたら、どうして、大変なセンセーションを捲^まき起したに相違ありません。それ程、その作業は変てこなものだったのです。

流石^{さすが}に附近の漁師達は怪しまないではいられませんでしたが。何の必要があつて、どの様な目的があつて、あの人も通わぬ離れ小島に、費用を惜^{おし}まず、土を掘り、樹木を植え、塀を築き、家を建てるのであろう。まさか菰田家の人達が、物好きにあの不便な小島へ住もうという訳^{わけ}ではなからうし、そうかと云つて、あんな所へ遊園地^{こしら}を拵^{こしら}えるというのも変な

ものだ。若しかしたら、菰田家の当主は気でも狂ったのではあるまいか、などと噂し合ったことでした。というのには、又訳のあることで、当時の菰田家の主あるじというのは、癩癩てんかんの持病を持っていて、それが嵩こうじて、少し前に一度死を伝えられ、附近の評判になった程の立派な葬式さえ営いとなんだのですが、それが、不思議にも生き返って、併しかし生き返ってからというものは、ガラリ性質が変って、時々非常識な、狂気じみた行動があるとの噂が、その辺の漁師達にまで伝わっていて、さてこそ、今度の工作も、やっぱりそのせいではないかと、疑いを抱いだくことになったのです。

それは兎も角かく、人々の疑惑の内に、と行って都に響く程の大評判にもならず、このえたいの知れぬ事業は、菰田家の当主の直接の指図もとの下に、着々と進しん捗ちよくして行きました。三月四月とたつに従って、島全体を取囲んで、丁度万里ばんりの長城ちやうじやうの様な異様な土塀ついでが出来、内部には、池あり、河あり、丘あり、谷あり、そして、その中央に巨大な鉄筋コンクリートの不思議な建物まで出来上りました。その光景がどの様に奇怪千万な、そして又世にも壮麗なものであったかは、ずっと後になって御話する機会があろうと思えますから、ここには省はぶきますが、それが若し完全に出来上って了ったなら、どんなにすばらしいものだったでありませんよう。心ある人が見たならば、現にある、半なかば荒廃した沖の島の景色か

ら、十分それが推察出来るに相違ありません。ところが、不幸にも、この大事業は、やつと完成するかしないに、思わぬ出来事の為に、頓挫を来したのです。

それが、どういう理由であったかは、ほんの一部の人にしか、ハッキリは分つて居りません。なぜか、事が秘密の中に運ばれたのです。その事業の目的も性質も、それが頓挫を来した理由も、一切曖昧の内に葬られて了つたのです。ただ外部に分つてゐることは、事業の頓挫と相前後して菰田家の当主とその夫人とが、この世を去り、不幸にも彼等の間に子種がなかつた為、今は親族のものがその跡目を相続しているということだけでした。その彼等の死因についても、色々の噂がないではありませんでしたが、単に噂に止つて、いずれも掴み所のない、随つてそれが其筋の注意を惹くという程のものではなかつたのです。島はその後も、やつぱり菰田家の所有地に相違ないのですが、事業は荒廃したまま、訪ねる人もなく、放擲され、人工の森や林や花園は、殆ど元の姿を失つて、雑草のはびこるに任せ、鉄筋コンクリートの奇怪な大円柱達も、風雨に曝されて、いつしか原形を止めなくなつて了いました。そこに運ばれた樹木石材等は、非常な費用をかけたものではありましたが、さて、それを都に運んで売却するには、却つて運賃倒れになるといふ様な点から、荒廃はしながらも、一木一石元の場所を換えた訳ではありません。随つて、今

でも、若し諸君が旅行の不便を忍んで、M県の南端を訪れ、荒海を乗り切って沖の島に上陸なさるならば、そこに、世にも不可思議なる人工風景の跡を見出すことが出来るに相違ありません。それは一見、非常に宏大な庭園に過ぎないのですが、ある人はそこから、何物か、途方もないある種の計画、若しくは芸術という様なものを感じないではいられぬであります。それと同時に、その人は又、その辺一体に漲る、みなぎ怨念おんねんというか、鬼気というか、兎も角も一種の戦慄せんりつに襲われたいではいられぬであります。

そこには実に、殆ど信ずべからざる、いちじょう一場の物語があるのです。その一部は菰田家に接近する人々には公然の秘密となつている所の、そしてその肝要な他の部分は、たった二三人の人物にしか知られていない所の、世にも不思議な物語があるのです。若し諸君が、私の記述を信じて下さるならば、そして、この荒唐無稽こうとうむげいとも見える物語を最後まで聞いて下さるならば、では、これからその秘密譚ひみつだんというのを始めることに致しましょうか。

二

お話は、M県とはずっと離れた、この東京から始まるのです。東京の山の手のある学生

街まちに、お定きまりの殺風景な、友愛館ゆうあいかんという下宿屋があつて、その最も殺風景な一室に、人見廣介ひとみひろすけという書生ともごろつきともつかぬ、その癖年輩くせは三十を余程過ぎていそうな不思議な男が住んで居りました。彼は沖の島の大土工が始まる五六年前にある私立大学を卒業し、それからずっと別に職を求めなくてもなく、といつてこれという確たしかな収入の道があるでもなく、謂わば下宿屋泣かせ、友達泣かせの生活を続けて、最後にこの友愛館に流れつき、彼かの大土工が始まる一年前位まで、そこで暮くしていたのです。

彼は自分では哲学科出身と称しているのですが、といつて、哲学の講義を聞いた訳ではなく、ある時は文学に凝こつて、夢中になり、その方の書物を獵あさつているかと思つと、ある時は飛んでもない方角違ちがひの建築科の教室などに出掛けて行つて、熱心に聴講して見たり、そうかと思つと、社会学経済学などに頭を突込んで見たり、今度は油絵の道具を買込んで、絵描まねきの真似事ごとをして見たり、馬鹿に気が多い癖くせに妙に飽あき性しょうで、これといつて本当に修得した科目もなく、無事に学校を卒業出来たのが不思議な位なのです。で、若し彼が何か学んだ所があるとすれば、それは決して学問の正道ではなくて、謂わば邪道の奇妙に一方に偏ゆゑしたものであつたに相違ありません。それ故ゆゑにこそ、学校を出て五六年もたつても、まだ就職も出来ないでまごまごごしている訳なのです。

尤も人見廣介自身が、何かの職について、世間並な生活を営もうなんて、神妙な考かんがえは持っていないからです。実をいうと、彼はこの世を経験しない先から、この世に飽き果っていたのです。一つは生来の病弱からでもありません。それとも青年期以来の神経衰弱のせいであつたかも知れません。何をする気にもなれないのです。人生の事が凡すべて、ただ頭の中で想像した丈けでもう十分なのです。何もかも「大したことはない」のです。そこで、彼は年中汚きたない下宿の一室に寝転んだまま、それで、どんな實際家も嘗かつて経験したことはない、彼自身の夢を見つづけて来ました。つまり、一口に云えば、彼は極端な夢想家に外ほかならぬのであります。

では、彼はそうして、あらゆる世せ上じょうのことを放擲して、一体何を夢見ていたかと云いますと、それは、彼自身の理想郷、無可有郷むかゆうきょうのこまごました設計についてでありました。彼は学校にいる時分から、プラトール以来の数十種の理想国物語、無可有郷物語を、世にも熱心に耽たんどく読よみました。そして、それらの書物の著者達が、実現すべくもない彼等の夢想を、文字に託たくして世に問うことによつて、せめてもの心やりとしていた、その気持を想像しては、一種の共鳴を感じ、それを以もつて、彼自身も僅わずかに慰なぐさめられることが出来たのでした。それらの著書の中でも、政治上、経済上などの理想郷については、彼は殆ど無関心で

ありました。彼の心をとらえたのは、地上の楽園としての、美の国夢の国としての、理想郷でありました。それ故、カベーの「イカリヤ物語」よりはモリスの「無可有郷だより」が、モリスよりは更に更にエドガア・ポオの「アルンハイムの地所」の方が、一層彼を惹きつけるのでした。

彼の唯一の夢想は、音楽家が楽器によつて、画家がカンヴァスと絵具によつて、詩人が文字によつて、様々の芸術を創造すると同じ様に、この大自然の、山川草木さんせんそうもくを材料として、一つの石、一つの木、一つの花、或は又そこに飛びかう所の鳥、けもの、虫けらの類に至るまで、皆生命を持つている、一時間毎に、一秒毎に、生育しつつある、それらの生き物を材料として、途方もなく大きな一つの芸術を創作することでありました。神によつて作られたこの大自然を、それには満足しないで、彼自身の個性を以て、自由自在に變改し、美化し、そこに彼独得の芸術的大理想を表現することでありました。つまり、言葉を換えて云えば、彼自身神となつてこの自然を作り換えることでありました。

彼の考えによれば、芸術というものは、見方によつては、自然に対する人間の反抗、あるがままに満足せず、それに人間各個の個性を附与したいという欲求の表れに外ならぬのであります。それ故に、例えば、音楽家は、あるがままの風の声、波の音、鳥獸の鳴声

などにあき足らずして、彼等自身の音を創造しようと努力し、画家の仕事はモデルを単にあるがままに描き出すのではなくて、それを彼等自身の個性によって変改し美化することであり、詩人は云うまでもなく、単なる事実の報道者、記録者ではないのであります。併し、これらの所謂いわゆる芸術家達は、何故なぜなれば楽器とか絵具とか文字とかいう、間接的な非効果的な七面倒な手段により、それ丈で満足しているのであります。どうして彼等はこの大自然そのものに着眼しないのですか。そして、直接大自然そのものを楽器とし、絵具とし、文字として駆使しないのであります。それがまるで不可能な事柄でない証拠には、造園術と建築術とが、現にある程度まで自然そのものを駆使し、変改し、美化しつつあるではありませんか。それをもう一層芸術的に、もう一層大がかりに、実行することは出来ないのでしょうか。人見廣介は斯くか疑うのであります。

随つて彼は、先に挙げた様な数々のユートピア物語よりは、それらの架空的な文字の遊戯よりは、もつと實際的な、その内のあるものはある程度まで彼と同じ理想を実現したかに見える、古来の帝王達の——主として暴君達の——華々ぎようせきしい業蹟ぎようせきに、幾層倍も惹きつけられるのであります。例えばエジプトのピラミット、スフィンクス、ギリシャ、ローマの城郭じやうかくてき的な或は宗教的な大都市、支那では万里の長城、阿房宮、日本では飛鳥朝あすか

以来の仏教的大建築物、金閣寺銀閣寺、単にそれらの建設物ではなくて、それを創造した英雄達のユートピア的な心事を想像する時、人見廣介の胸は躍るのでありました。

「若し我に巨万の富を与えるならば」

これはあるユートピア作者の使用した著書の表題であります、人見廣介も又、常に同じ歎声を洩すのでした。

「若し俺が使い切れぬ程の大金を手に入れることが出来たらばなあ。先ず広大な地所を買入れて、それはどこにすればいいだろう。数百数千の人を役して、日頃俺の考えている地上の楽園、美の国、夢の国を作り出して見せるのだがなあ」

それにはああして、こうしてと、空想し出すと際限なく、いつも頭の中で、完全に彼の理想郷を拵えて了わらないでは気が済まぬのでした。

併し気がつけば、夢中で拵えていたものは、ただ白昼の夢、空中の楼閣に過ぎなくて、現実の彼は、見るも哀れな、その日のパンにも困っている、一介の貧乏書生でしかないのです。そして、彼の腕前では、仮令一生を棒に振って、力限り根限り、働き通して見た所で、たった数万円の金さえ、蓄積することは出来相もないのであります。

所詮彼は「夢見る男」でありました。一生涯、そうして、夢の中では有頂天の美に

酔いながら、現実の世界では、何というみじめな対照でありましょう。汚い下宿の四畳半にころが転つて、味気ない其日そのひ其日を送つて行かねばならないのです。

そうした男は、多く芸術にはしつて、そこにせめてもの安息所を見出すものですが、何の因果か、彼には仮令芸術的傾向があつたとしても、最も現実的な、今云う彼の夢想の外には、恐らくどの芸術も、彼の興味を惹く力はなく、又その才能にめぐまれてもいなかったのです。

彼の夢が若し実現出来るものとしたならば、それは実に、世に比類なき大事業、大芸術に相違ないのです。それ故、一度ひとたびこの夢想境を彷徨さまよつた彼に取つては、世の中の如何なる事業も、如何なる娯楽も、さては如何なる芸術さえもが、まるで価値のない、取るに足らぬものに見えたのは、誠に無理もないことでした。

併し、そうして凡ての事柄に興味を失つた彼とても、食う為には、やつぱり多少の仕事をしてしない訳には行きません。それには、彼は学校を出て以来、安翻譯したうけの下請したうけだとか、お伽噺だとか、まれには大人の小説だとかを書いて、それを方々ほうほうの雑誌社に持込んで、かからくも其日のたつきを立てているのでした。最初の内は、それでも芸術というものに多少の興味もあり、丁度古来のユートピヤ作者達がした様にお話の形で彼の夢想を発表する

ことにも少なからぬ慰めを見出すことが出来ましたので、いくらか熱心にそうした仕事を続けていたのですが、ところが、彼の書くものは、翻訳は別として、創作の方は妙に雑誌社の気受けが悪いのでした。それというのが彼のは、彼自身の例の無可有郷を、色々な形式で、微に入り細を穿ち描写するに過ぎない、謂わば一人よがりの退屈極まる代物だったものですから、それは無理もないことと云わねばなりません。

そんな訳で、折角気を入れて書き上げた創作などが、雑誌編輯者に握りつぶされたことも一二度ではなく、そこへ持つて来て、彼の性質が、ただ文字の遊戯などで満足するには、余りに貪婪であつたものですから、小説の方では一向うだつが上らないのです。といつて、それをも止めて了つては、早速其日の暮しにも困るので、厭々ながら、いつまでも下積み三文文士の生活を続けて行く外はないのでした。

彼は一枚五十銭の原稿を書きながら、そして、その暇々には、彼の夢想郷の見取図だとか、そこへ建てる建築物の設計図だとかを、何枚となく書いては破り、書いては破りしながら、彼等の夢想を思うままに実現することの出来た、古来の帝王達の事蹟を、限りなき羨望を以て、心に思い描くのでした。

さて御話というのは、人見廣介がその様な状態で生き甲斐のない其日其日を送っている所へ、ある日のこと、それは先に云った例の離れ島の大土工が始まる一年ばかり前に当るのですが、実にすばらしい幸運が舞い込んで来たことから始まるのです。それは一口に幸運などという言葉では云い尽せない程、奇怪至極な、寧ろ恐るべき、それでいてお伽噺にも似た蠱惑を伴う所の、ある事柄でありました。彼はその吉報（？）に接して、やがてある事に思い当ると、恐らく何人も嘗て経験したことのない不思議な歓喜を味い、そしてその次の刹那には、彼自身の考えの余りの恐しさに、齒の根も合わぬ程の戦慄を覚えたのであります。

その報知を齎した者は、大学時代彼の同級生であった、一人の新聞記者でありましたが、ある日、その男が、久し振りで廣介の下宿を訪れ、何かの話の序に、無論彼としては何の気もつかず、ふとその事柄を言い出したのでした。

「時に、君はまだ知るまいが、つい二三日前に君の兄貴が死んだのだよ」
「なんだって？」

その時人見廣介は、相手の異様な言葉に、ついこんな風に反問しないではいられませんでした。

「ホラ、君はもう忘れたのかい。例の有名な君の片割かたわれだよ、双生児ふたごの片割だよ。菰田源三郎げんざぶろうさ」

「アア、菰田か。あの大金持の菰田がかい。そいつは驚いたな。全体何の病気で死んだのだい」

「通信員から原稿を送って来たのだよ。それによると、先生持病の癩癩かたがねでやられたらしい。発作が起つたまま回復しなかったのだね。まだ四十の声も聞かないで、可哀相なことをしたよ」

そのあとにつけ加えて、新聞記者はこんなことを云いました。

「それにしても、僕は今更いまさら感心したね。なんてよく似ているのだろう。君とあの男がさ。原稿と一緒に菰田の最近の写真を入れて来たのだが、それを見ると、あれから五六年たつけれど、君達は、寧ろ学生時代以上に似て来たね。あの写真の口髭くちひげの所へ指を当てて、そこへ、君のその眼鏡めがねをかけさせればまるでそっくりなんだからね」

この会話によって、読者諸君が已すでに想像された通り、貧乏書生の人見廣介と、M県随一

の富豪菰田源三郎とは、大学時代の同級生で、しかも、不思議なことには、外の学生達から双生児という渾名あだなをつけられていた程、顔形から脊恰好せかつこう、声音こわねに至るまで、まるで瓜うり二つだったのです。同級生達は彼等の年齢の相違から、菰田源三郎を双生児の兄と呼び、人見廣介を弟と呼んで、何かにつけて二人をからかおうとしました。からかわれながら、彼等は、お互たがいに、その渾名が決して偽りいつわではないことを、自みずから認めない訳には行かなかつたのです。こうしたことは、間々ままある習いとは云いながら、彼等の様に、双生児でもないので、双生児と間違まちがう程も似ているというのは、一寸ちよつと珍らしい事でした。殊にそれが、後のちになって、世にも驚くべき怪事件を生むに至つた事実を思えば、因縁いんねんの恐しさに、身震いを禁じ得ないのです。

彼等が双方とも、余り教室へ顔を見せない方だったのと、人見廣介が軽度の近眼で、始し終じゆう眼鏡を用いていたのとで、二人顔を合せる機会が少く、顔を合せた所で一方は眼鏡がある為、遠方からでも十分区別することが出来たものですから、さしたる珍談も起らないで済みましたが、それでも、長い学生生活中には、笑い話の種になる様な事柄が一二度ならずありました。それ程彼等はよく似ていたのです。

その所謂双生児の片割が死んだというのですから、人見廣介に取つては、外の同窓の訃ふ

報ほうに接したよりは、いくらか驚きが強かつた訳ですが、でも、彼は当時から、まるで自分の影の様な菰田に対して、彼等が余りに似過ぎてゐる為に却つて嫌悪の情を抱いていた位で、無論悲しみを感ずるといふ程ではありませんでした。とは云え、この出来事には何とも知れず人見廣介をうつものがあつたのです。それは悲しみというよりは驚き、驚きというよりは、何かこう、妙に不気味な、えたいの知れぬ予感の様なものでありました。

併しそれが何であるか、相手の新聞記者がそれから又長い間世間話を續けて、さて歸つて了うまで、彼は一向氣づかないでいたのですが、一人になつてから、妙に頭に残つてゐる菰田の死について、色々と考えている内に、やがてある途方もない空想が、夕立雲の拈がる時の様な、早さ、不気味さで、彼の頭の中にムラムラと湧き起つて来たのです。彼は真まっさお青になつて齒を喰いしばつて、はてはガタガタ震えながら、いつまでもじつと一つ所に坐つたまま、その段々ハッキリと正体を現わして来る考を見つめて居りました。ある時は、余りの怖さに、次々と湧き上る妙計を、押え止めようと努力したのですが、どうして止まるどころか、押えれば押える程、却つて百ひやくいろ色眼鏡の鮮かさを以て、その悪計の一つ一つの場面までが、幻想されて来るのでした。

四

彼がその様な、謂わば未曾有の悪企みを考えつくに至った一つの重大な動機は、M県の菰田の地方では、一般に火葬というものがなく、殊に菰田家の様な上流階級では、猶更らそれを忌んで、必ず土葬を営むに極まっているという点に在りました。その事は在学時代菰田自身の口からも聞いて、よく知っていたのです。それともう一つは、菰田の死因が癩癩の発作からであつたことでした。これが又、彼のある記憶を呼び起さないではいなかつたのです。

人見廣介は、幸か不幸か、以前ハルトマン、ブーシユ、ケンプナーなどという人々の、死に関する書物を耽読したことがあつて、殊に仮死の埋葬については、可成の知識を持つていたものですから、癩癩による死というものが、如何に不確で、生理めの危険を伴うものかを、よく心得ていたのです。多くの読者諸君は、多分ポオの「早過ぎた埋葬」という短篇をお読みになつたことがおありでしょう。そして、仮死の埋葬の恐しさを十分御承知でありましょう。

「生きながら葬られるという事は、嘗て人類の運命に落ち来つた、これらの極端な不幸

(バーソロミウの大虐殺其他の歴史上の戦慄すべき事件)の内で、疑なく最も恐しきものである。そして、これが屢々、甚だ屢々、この世に起っていることは、少し物の分る人には否定出来ない所である。死と生とを分つ境界は、たかが漠とした影である。どこで生が終り、どこで死が始まるのだから、誰が定めることが出来よう。ある疾病にあつては、生命の外部的機関が悉く休止してうことがあがある。しかもこの場合、こうした休止状態は、ただ中止に過ぎぬのである。不可解な機制の一時的停止に過ぎぬのである。だから暫くたてば、(それは数時間のこととあれば、数日のことも、或は数十日のこともあるのだ)目に見えぬ不思議な力が働いて、小歯車、大歯車が魔法の様に再び動き出す」

そして、癩癩がその様な疾病の一つであることは、色々の書物に示された实例によつて、疑うべくもないのです。例えば、嘗てアメリカの「生理め防止協会」の宣伝書に発表された仮死の起り易い数種の疾病の中にも、明かに癩癩の項目が含まれていたのを、なぜか彼はよく覚えていました。

彼は数知れぬ仮死の埋葬の实例を読んだ時、どんなに変てこな感じにうたれたことでしょうか。その名状すべからざる一種の感じに対しては、恐怖とか戦慄とかいう言葉は、余りにありふれた、平凡至極なものに思われた程でありました。例えば、妊婦が早過ぎた

埋葬に遇つて、墓場の中で生き返り、生き返ったばかりか、その暗闇の中で分娩して、泣きわめく嬰兒を抱いて悶え死んだ話などは、（恐らく彼女は、出ぬ乳を、血まみれの嬰兒の口に含ませていたことでもありません）まるで焼きつけた様な印象となつて、いつまでもいつまでも彼の記憶に残っていました。

併し、癩癩がやはりそうした危険を伴う病氣だことを、彼はどうして、そんなにハッキリと覚えていたか、人見廣介自身では、少しも氣づかなかつたのですが、人間の心の恐しさには、彼はそれらの書物を読んだ時に、彼と生写しの、双生児の片割とまで云われていた菰田が、大金持の菰田が、やはり癩癩病みであることを、無意識の中に意識していなかったとは云えないのです。先に云う通り生れつきの夢想家である人見廣介が、クネクネと考え廻すたちの彼が、仮令ハッキリ意識しなかつたとは云え、そこへ氣のつかぬ筈は無いのです。

若しそうだとすれば、数年以前彼の心の奥底に、私に播かれた種が、今菰田の死に遇つて、始めてハッキリした形を現したとも考えられぬことはありません。が、それは兎も角、彼の世にも稀なる悪計は、そうして、彼が身体中からじりじりとにじみ出す冷汗を感じながら、その夜一夜、横にもならず坐り続けている内に、始めはまるでお伽噺か夢の様な

考えであつたのが、少しづつ、少しづつ、現実の色を帯び始め、遂には、手を下しさえすれば必ず成就じょうじゆする、極ごくくあたり前の事柄にさえ思われて来るのでありました。

「馬鹿馬鹿しい。いくら俺とあいつとが似ているからといって、そんな途方もない……：實際途方もないことだ。人間始つて以来、こんな馬鹿らしい考えを起したものが、一人だつてあるだろうか。よく探偵小説などで、双生児の一方が、他の一方に化けて一人二役いちにんにやくを勤める話は読むけれど、それさえも、實際の世の中には先ず有り相もないことだ。まして、今俺の考えている悪企みなど、正に狂気の妄想じやないか。つまらないことは考えず、お前はお前の分相應に、一生涯実現出来つこないユートピヤを夢にでも見ているがいいのだ」

幾度いくたびか、そんな風に考えては、余りに恐しい妄想を振り落そうと試みはしたのですが、併し、そのあとから、すぐに又、

「だが、考えて見れば、これ程造作のない、その上少しの危険も伴わぬ計画というものは、滅多めったにあるものではない。仮令如何程骨いかほどが折れようと、危険を冒おかそうと、万一成功したならば、あれ程お前が熱望していた、長の年としつき月ただそれのみを夢見つづけていた、お前の夢想郷の資金を、まんまと手に入れることが出来るではないか、その時の楽しさ、嬉しさはまあどの様であろう。どうせ飽き果てたこの世の中だ。どうせうだつの上らない一生だ。

よしんば、その為に命を落したところで、何の惜しいことがあるものか。ところが實際は、命を落すどころか、人一人殺すではなし、世の中を毒する様な悪事を働く訳ではなし、ただ、この俺というものの存在を、手際よく抹殺して、菰田源三郎の身替りを勤めさえすれば済むのだ。そして、何をするかと云えば、古来何人も試みたことのない、自然の改造、風景の創作、つまり途方もなく大きな一つの芸術品を造り出すのではないか、楽園を、地上の天国を創造するのではないか。俺として何処にやましい点があるのだ。それに又、菰田の遺族にしたところが、そうして、一度死んだと思つた主人が活き返ってくれたなら、喜びこそすれ、何の恨みに思うものか、お前はそれをさも大悪事の様に思い込んでいるが、見るがいい、こうして一つ一つ結果を吟味して行けば、悪事どころか、寧ろ善事なのではないか」

そう筋道を立てて見ると、成程、条理整然としていて、実行上に少しの破綻もなければ、且は又、良心にとがめる点も殆どないと云つていいのでした。

この計画を実行するについて、何より都合のよかつたのは、菰田源三郎の家族といつては、両親はとつくになくなって、たつた一人、彼の若い細君がいる切りで、あとは数人の雇人ばかりなことでありました。尤も彼には一人の妹があつて、東京のある貴族

へ嫁入りしているのですし、国の方にも、そうした大家たいけのことであつて見れば、定めし沢た山の親族くさんがいることでしょうが、それらの人が亡き源三郎と瓜二つの人見廣介という男のあることを知つてゐる筈もなく、どうかして噂位聞いていたところで、まさかこれ程似ていようとは想像しないでありましょうし、その上、その男が源三郎の替かえだま玉となつて現れるなどは、夢にも考える道理がありません。それに、彼は生れつき、不思議とお芝居のうまい男でもあつたのです。たつた一人恐しいのは、細こまかい所まで源三郎の癖を知つてゐるに相違ない、当人の細君ですが、これとても、用心さえしていれば、取り分け夫婦の語らいという様なことを、なるべく避けていたならば、恐らく気づくことはないでしょう。それに、一度死んだものが生き返つて来たのですから、多少容貌なり性質なりが變つていた所で、異常な出来事の為にそんな風になつたものと思えば、さ程不思議がることもない筈です。

こうして彼の考えは段々微細な点に入つて行くのでしたが、それらのこまごました事情をあれこれと考え合わせるに従つて、彼のこの大計画は、一步一步、現実性、可能性を増して来る様に見えました。残る所は、これこそ彼の計画に取つての最大難関に相違ないのですが、如何にして彼自身の身柄を抹殺するか、又如何にして菰田とせいの蘇生そせいをほんとうらし

く仕組むか、それにつけては本物の菰田の死体を如何に処分するか、という点でありました。

この様な大悪事を（彼自身如何様に弁護しようとも）企む程の彼ですから、生れつき所謂奸智に長けていたのでもありません。そうしてクネクネと執念深く一つ事を考え続けている内に、それらの最も困難な点もなんなく解決することが出来ました。そして、これによしと思つてから、彼は更にもう一度、微細な点に互つて、已に考えたことを、又改めて考え直し、愈々一点の隙もないと極まると、さて最後に、それを実行するか否かの、大決心を定めねばならぬ場合が、来たのでした。

五

身体中の血が頭に集つた感じで、もうそうになると、却つて今考えている計画が、どれ程恐しいことだかも忘れて了つて、殆ど一昼夜というもの、考えに考え、練りに練つた挙句、結局彼はそれを決行することに極めたのでした。後になつて思い出すと、当時の心持は、まるで夢遊病みたいなもので、さて実行に取りかかつて、妙に空虚な感じで、それ程の

大事が、何だか暢気のんきな物見遊山ものみゆざんにでも出掛ける様な、併しかし心のどこかの隅には、今こうしているのは実は夢であつて、夢のあちら側にもう一つの本当の世界が待っているのだという意識が、蟠わだかまつている様な、異様な気持が続いていたのでした。

先に云つた通り彼の計画は、二つの重要な部分に分れていました。その第一は彼自身を、即すなわち人見廣介という人間を、この世からなくして了うことですが、それに着手するに先だつて、一度菰田の邸やしきのあるT市に急行して、果して菰田が土葬にされたかどうか、その墓地へうまく忍び込むことが出来るかどうか、菰田の若い夫人はどの様な人物であるか、召め使つかい共どもの気質はどんな風か、それらの点を一応検しらべて置く必要があります。その結果若し、この計画に破綻を来す様な危険が見えたならば、そこで、始めて実行を断念しても遅くはないのです、まだまだ取返し之余地はあるのでした。

併し、彼がこのままの姿でT市に現れることは、勿論差控さしひかえなければなりません。その姿が人見廣介と分つても、或あるは又、仮令菰田源三郎と見誤いられても、孰いれにしろ彼の計画に取つては致命傷でありました。そこで、彼は彼独得の変装おこなを行つて、この第一回のT市への旅を旅立つことにしたのでした。

彼の変装方法というのは、実に無造作なもので、これまでの眼鏡を捨てて、極く大型の、

併し余り目立たぬ形の、色眼鏡をかけ、一方の目を中心に、眉まゆから頬ほおにかけて、大きく畳たたんだガーゼを当てて、口にはふくみ綿をして、これも目立たぬ口くちひげ髭をつけ、頭を五分刈りにする。と、ただこれ丈けのことでしたが、併し、その効果は実に驚くべきもので、出発の途中、電車の中で友達に逢つてさえ、少しも感づかれなかつた程でありました。人間の顔の中で最も目立つものは、最も各自の個性を發揮しているものは、その両眼に相違ありません。それが証拠には、掌てのひらで鼻から上を隠したのと、鼻から下を隠したのでは、まるで効果が違うのです。前の場合には、若しかすると人違いを仕兼しかねませんけれど、後の場合では、すぐその人と分つて了うのです。そこで、彼は先ず両眼を隠す為に色眼鏡を用いました。ところが、色眼鏡というものは、殆んど完全に目の表情を隠して呉くれる代りには、それをかけている人に、何となくうさん臭い感じを与えるものです。この感じを消す為に、彼はガーゼを一方の目に当て、眼病患者を装いました。こうすれば、同時に又、眉や頬の一部を隠すことも出来て、一挙兩得でもあるのです。それに、頭髪かみの恰好かつこうを極度に換え、服装を工夫すれば、もう七分通りは変装の目的を達することが出来たのですが、彼は更に念には念を入れて、ふくみ綿によつて頬から顎あごの線を変え、つけ髭によつて口の特徴を隠すことにしました。その上歩きつぶりでも換えることが出来たなら九分九厘くぶくりん人見

廣介はなくなつて了うのです。彼は変装については、日頃から一つの意見を持つていて、鬢かすらや顔料を使用するなどは、手数料がかかるばかりでなく、却つて人目を惹く欠点があり、とて迎も実用に適しないけれど、こうした簡単な方法を用いるならば、日本人だつて、まんざら変装出来ないものでもない、信じていたのでした。

彼はその翌日、下宿屋の帳場へは、思う仔細しさいがあつて、一時宿を引払つて旅に出る、行く先としては定まらぬ、謂わば放浪の旅だけれど、最初は伊豆半島の南の方へ志す積りつもだと告げ、小さな行李こつり一つを携たずえて出発しました。そして、途中で、必要の品物を買ひ、人通りのない道ばたで、今云つた変装を終ると、まっすぐに東京駅へかけつけ、行李は一時預けにして、T市の二つ三つ先の駅までの切符を買うと、彼は三等車の人ごみの中へともぐり込むのであります。

T市に到着した彼は、それから足かけ二日、正しく云えば満一昼夜の間、彼の独得の方法によつて、実に機敏に歩き廻り聞き廻つて、結局目的を果すことが出来ました。その詳細は、あまり管くだ々くだしくなりませんから、茲こゝには省くことに致しますが、兎も角、調査の結果は、彼の計画が決して不可能事でないことを明かにしたのであります。

そうして、彼が再び東京駅へ立歸つたのは、例の新聞記者の話聞いた日から三日目、

菰田源三郎の葬儀が行われた日から六日目の夜、八時に近い時分でした。彼の考えでは遅くとも源三郎の死後十日以内には、彼を蘇生させる積りなのですから、余す所四日間、実に大多忙と云わねばなりません、彼は先ず一時預けの小行李を受取ってから、駅の便所に入つて例の変装をとりはずし、元の人見廣介に戻ると、その足で霊岸島の汽船発着所へと急ぎました。伊豆通いの船の出船は午後九時、それに乗つて兎も角も伊豆半島の南に向うのが彼の予定の行動なのです。

待合所へかけつけると、船ではもうガランガランと乗船合図のベルが鳴り響いていました。切符は二等、行先は下田港、行李をかついで、暗い棧橋を駆け、巖乗な板の歩みを渡つて、ハッチに入るか入らぬに、ボーツと出帆の汽笛でした。

六

彼の目的に取つて都合だったことには、十畳敷き程の船尾の二等室には、たった二人の先客があつたばかりで、しかもそれが二人共田舎者らしく、セルの着物にセルの羽織という出でたち、顔も巖乗らしく日に焼けて、その代りには頭の働きは一向鈍感相な中年の

男達でありました。

人見廣介は黙つて船室に入ると、先客達からずつと離れた、隅つこの方に席を取つて、さて一寐入りという恰好で、備えつけの毛布の上に横よこたわるのでした。併しかし勿論寐て了う訳ではなく、うしろ向きになつたまま、じつと二人の男の様子をうかがつていたのです。ゴロゴロゴツトン、ゴロゴロゴツトンと、神経をうずかせる様な機関ひびきの響ひびきが、全身に伝わつて来ます。鉄の格子こうしで囲つた、鈍い電燈の光が、横になつた彼の影を、長々と毛布の上に投げています。うしろでは、男達は知合いと見えて、まだ坐つたまま、ボソボソと話し合つている、その声が機関の音とごつちやになつて、妙に睡ねむけ気を誘う様な、けだるいリズムを作るのです。その上、海は静しずからしく、波の音も低く、動揺も殆んど感じられぬ程で、そうして、じつと横になつていきますと、二三日来の興奮が、徐々に静まつて行つて、その空虚へ、名状し難がたい不安の念が、モヤモヤと湧き上つて来るのでした。

「今ならまだ遅くない。早く断念するがいい。取り返しがつかなくなる前に、早く断念するがいい。お前は生真面目きまじめに、お前のその氣違あやまちいめいた妄想を實行しようとしているのか。本当に冗談ではなかつたのか。一体それでお前の精神状態は、健康なのか。若しやどこかに故障があるのではないか」

時間と共に彼の不安は増して行きました。併し、彼はこの大魅力をどうして捨て去ることが出来ましよう。不安がる心に対して、彼のもう一つの心が説服せつぷくを始めるのです。どこに不安があるのだ。どこに手抜きがあるのだ。これまで計画した仕事を、今更ら断念出来るものか。そして、彼の頭の中には、彼の目論見もくろみの一つ一つが、微細な点に互わたつて、次々と現れて来るのです。しかも、そのどの一つにも、少しの手落ちだって、あろう道理はないのでした。

ふと気がつくと、二人の客の話はなし声こゑがいつの間にかやんで、その代りに、調子の違つた二通りの鼾いびきの音が、部屋の向側むこうかわから響いていました。寝返りを打って、細目を開いて見ますと、男達は健康らしく大の字になって、相好そうごうをくずして、よく寐入っているのです。

何者か、性急せつかちに彼の実行をせき立てるのが感じられました。機会が到来したという考えが、彼の雑念を立所に一掃いつそうして了いました。彼は何かに命ぜられる様に少しの躊躇ちゆうちもなく、枕頭まくらもとの行李を開いて、その底から一枚の着物の切れはしを取り出しました。それは妙な形に引き裂かれた、五六寸位の古びた木綿もめん緋がすりでした。それを掴むと、行李ふたは元の通りに蓋ふたをして、かれはソツと甲板かんぱんに忍び出るのでした。

もう十一時を過ぎていました。宵の内は時々船室へも顔を見せたボーイや船員達も、それぞれ彼等の寝間に退いたのか、その辺には人影もありません。前方の一段高い上甲板には、定めし舵手が徹宵の見張りを続けているのでしようが、今人見廣介の立っている所からはそれも見えません。舷によれば、しぶきを立てる大波のうねり、船尾に帯をのべる夜光虫の燐光、目を上ぐれば、眉を圧して迫る三浦半島の巨大なる黒影、明滅する漁村の燈火、そして、空にはほこりの様な無数の星屑が、船の進行につれて、鈍い回転を続けています。聞えるものは、鈍重な機関の響と、舷にくだける波の音ばかりです。

この分なれば、彼の計画は先ず発覚する心配はありません。幸い時は春の終り、海は眠った様に静です。航路の関係上、陸影は徐々に船の方へ近づいて来ます。後はもう、その陸と船とが最も接近する、予定の場所を待つ丈けなのです。（彼は度々この航路を通ったことがあって、それがどの辺だかをよく心得ていました）そして、たった数町の海上を、人目にかからぬ様に泳ぎ渡りさえすればよいのでした。

彼は先ず闇の中に、舷を探し廻つて、欄干の外部に釘の出ている個所を見つけると、その釘へ、さい前の緋の切れを、風で飛ばぬ様にしっかりと引懸けて置いて、それから、帆布の影に隠れ、素肌にただ一枚着けていた、今の切れと同じ様な柄の古びた袷を脱ぐと、

袂たもとの中の財布と変装用具とを落さぬ様にくるみ、そいつを兵児帯へこおびでかたく背中へ結びつけました。

「さあこれでよし。少しの間冷い思いをすればいいのだ」

彼は帆布の影を這い出して、もう一度その辺を眺め廻し、大丈夫誰も見ていないことが分ると、巨大な守宮やもりの恰好で、甲板上を舷へと這はって行き、スルスルと欄干を乗り越えました。音を立てない様に何かにすがって飛び込むこと、スクリュウに捲き込まれない用心をすること、この二つの点は、彼がもう何度となく考えて置いたことでした。それには、船が水道を通る時、方向転換の為に速度をゆるめた際が最も都合なのです。そして、その時が又、陸にも一番近いのです。で、彼は舷の何かの綱にすがって、いつでも飛び込める用意をしながら、その方向転換の好機を、今か今かと待ち構えました。

不思議なことには、この激情的な場合にも拘もつとらず、彼の心はいとも冷静に静まり返っていました。尤も、進行中の船から海に飛び込んで、対岸に泳ぎつくことは、別段罪悪というではありませんし、それに距離も短く、泳ぎの方の自信もあり、大した危険のないことは分っていたのですけれど、と行って、それがやっぱり彼の大陰謀の一つの予備行為であって見れば、彼の気質として不安を感じないでいられよう筈はずがないのでした。それにも拘

らず、かくも冷静に、落ちつき払って行動することが出来たのは、何とも不思議と云わねばなりません。彼は後のちになつて、計画に着手して以来、一日毎に大胆にふてぶてしくなつて行つた、彼自身の心持をふり返り、そのはげしい変化に、非常な驚きを味つたことですが、彼がそうして舷にとりすがつた時の心持が、恐らくその手始めであつたのかも知れませんが。

やがて、船は目的の個所に近づき、ガラガラという、舵器だきくさりの鎖の音がして、方向を換え始め、同時に速度も鈍くなつて来ました。

「今だ！」綱を離す時には、それでも、流石に心臓がドキンと躍り上りました。彼は手を離すと同時に、全身の力をこめて舷を蹴り身を平たいらかにして、なるべく遠い所へ、丁度水に乗つた形で、音の立たぬ様にすべり込む方法を執とりました。

ゴボンという水音、ハツと身にしむ冷たさ、上下左右から迫つて来る海水の力、もがいても、もがいても水の表面に浮び上らぬもどかしさ、その中で、彼は併むし、滅多無む上しょうに水を掻かき、水を蹴り、一寸すんでも一尺でも、スクリュウから遠すんざかることを忘れませんでした。

どうしてあの舷うずまぎの渦を泳ぎ切ることが出来たか、それから、仮令穏やかな海であったとは云え、しびれる様な冷水の中を、数町の間も、どうして耐えしのぶことが出来たか、後になつて考えて見ても、彼にはその我ながら不思議な力をどうも理解出来ないのでした。

かくて、幸運にも計画の第一着手を、美事みごとにやりおさせた彼は、疲れ切った身体を、どこも知れぬ漁村の暗闇の海辺に投げ出して、そこで夜の明けるのを待ち、まだ乾き切らぬ着物を着、変装ほごこを施して、村人達が起き出いでぬ内に、横須賀よこすかと覚しき方向に向つて歩き出すのでした。

七

昨夜まで人見廣介であつた男は、それから一日、乗替駅の大船おおふなの安宿で暮して、その翌日の午後、丁度夜よに入つてT市に着く汽車を選んで、やっぱり変装のまま、三等車の客となりました。諸君は已すでに御氣づきでありましょうが、彼がこうして貴重な一日を、為すなこともなく過したのは、彼の自殺のお芝居が、うまく目的を果したかどうかを、知ろうとして、その載る新聞の出るのを待ち合わせる為でありました。そして、彼が愈々T市へ

乗込む以上は、その新聞記事が、思う壺にはまっつて、彼の自殺を報道していたことは申すまでもないのです。

「小説家の自殺」という様な標題で、（彼も死んだお蔭で他人から小説家と呼んで貰うことが出来ました）小さくではありましたが、どの新聞にも彼の自殺の記事がのつていました。比較的詳しく報道した新聞には、遺された行李の中に一冊の雑記帳があつて、それに見廣介という署名もあり、世をはかなむ辞世の文句が記されていたのと、恐らく飛び込む時に引かかったのであろう、舷の釘に彼の衣類と覚しき緋の切れ端が、残されていたので、死人の身柄なり自殺の動機なりが分明した由記されてありました。つまり彼の計画は、まんまと首尾よく成功したのであります。

幸なことに、彼には、この狂言自殺によつて泣く程の身寄りもありませんでした。無論彼の郷里には、家兄の家もあり（在学当時彼はその兄から学資を貰っていたのですが、近頃では兄の方から彼を見捨てて了った形でした）二三の親族もあつたのですから、それらの人が彼の不時の死を聞き知つたならば、多少は惜しみもし、歎いても呉れることでしょうけれど、その程度のさし触りは、元より覚悟の上でもあり、彼として別段心苦しい程のことでもないのです。

それよりも、彼は、この自分自身を抹殺して了ったあとの、何とも形容の出来ない、不思議な感じで夢中になっていました。彼は最早もはや、国家の戸籍面に席もなく、広い世界に唯一ただ一人身寄りもなければ友達もなく、其そのうえ上名前さえ持たぬ所の、一個のストレンジャーなのでありました。そうになると、自分の左右前後に腰かけている乗客達も、窓から見える沿道の景色も、一本の木も、一軒の家も、まるでこれまでとは違った、別世界のものに感じられるのでした。それは一面、非常にすがすがしい、生れたばかりという気持でありましたが、又一面では、この世にたった一人という、しかもその一人ぼっちの男が、これから身に余る大事業を為しとげねばならないという、名めい状じょうし難がたき淋さみしさで、はては、涙ぐましくさえなつて来るのを、どうすることも出来ませんでした。

汽車は、併し、彼の感懐などには関係なく、駅から駅へと走り続け、やがて、夜に入つて目的地のT市へと到着しました。前さきの人見廣介は、駅を出ると、その足で直ただちに菰田家の菩提寺ぼだいじへと、急ぐのでした。幸い寺は市外の野中に建っていましたので、もう九時過ぎという、その時分には人通りもなく、寺の人達にさえ気をつけていれば、仕事を悟られる心配はありません。それに、附近には昔ながらのあけっ放しな百姓家やが点在していて、その納屋なやから鋤くわを盗み出す便宜べんぎもあるのです。

あぜ道に沿った、まばらな生垣いけがきをもぐり越すと、そこがもう問題の墓場でした。闇夜ではありましたが、その代りに星が冴えているのと、前に来て見当をつけて置いたのとで菰田源三郎の新墓あらばかを見つけ出すのは、何の造作もありませんでした。彼はそこから石塔の中を本堂に近づいて、とざされた雨戸の隙から中を窺うかがって見ましたが、ひっそりとして音もなく、辺鄙な場所の上に、朝の早い寺の人達は、もう寐て了った様子でした。

これなら大丈夫と見定めた上、彼は元のあぜ道にとつて返し、附近の百姓家をあさり廻つて、難なく一本の鍬を手に入れ、源三郎の墓地に戻つて来た時分には、それが皆猫の様に蹻あしおと音を盗み、闇の中で身を隠しての仕事だったものですから、非常に手間を取り、もう十一時近くになっていました。彼の計画に取つては丁度頃合いの時間なのです。

さて彼は、物凄い闇の墓場に、鍬をふるつて、世にも恐るべき墓掘りの仕事を始めるのでありました。新墓のこととて、掘り返すのに造作はありませんが、その下に隠れているものを想像すると、数日来多少場数ばかずを踏み、貪慾どんよくに気の狂った彼とても、云い難き恐れのために、戦慄を感じないではいられませんでした。が、何を思う暇もないのです。十回も鍬を下おろしたかと思うと、もう棺かんの蓋が現れて了つたのです。

今更ら躊躇している場合ではありません。彼は満身の勇を振ふるつて、その、闇にもほの白

く見えている白木の板の上の、土を取りのけ、板と板との間に鍬の先をかって、一つうんと力を入れると、ギギ……と骨の髄に響く様な音を立てて、併し難なく蓋は開きました。その拍子ひょうしに、まわりの土が崩れて、サラサラと棺の底へ落ちるのさえ、何か生あるものしやうの仕業しわざの様に感じられ、彼は命も縮む思いをしたことです。蓋を開くと同時に、名状し難き異臭が彼の鼻をつきました。死んでから七八日もたっているのですから、源三郎の死体は、もう腐り始めたのに相違ありません。彼は当の死体を見る前に、已に、先ずその異臭にたじろがないではいられませんでした。

墓場という様なものを、余り怖がらない彼は、それまで存ぞんが外平気で仕事を続けることが出来たのですが、さて棺の蓋を取って、もう一つの彼といてもいい、菰田の死骸と顔を合せる際になると、始めて、何かこう、えたいの知れぬ影の様なものが、魂の底からじりじりと込み上げて来る感じで、ワツと云つて、いきなり逃げ出し度たい程の恐怖に襲われました。それは決して、幽霊の怖さなどではなく、もつと異様な、どちらかと云えば現実的な、それ丈けでは到底云い尽せないのですけれど、例えば暗闇の大広間で、たった一人、蠟燭ろうそくの光で自分の顔を鏡に写す時に似た、その幾層倍も恐しい感じでありました。

沈黙の星空もとの下に、薄ぼんやりと沢山の人間が立っている様な石塔、そのまんまかに、

ぼつかりと口を開いた、まっ黒な穴。薄気味の悪い地獄の絵巻物に似た、自からその画中の人になった気持です。そして、その穴の底の、一寸見た位では識別出来ぬ暗さの中に、横わっている死人は、外でもない彼自身なのであります。この死人の顔を識別出来ぬという点が、一層恐しさを増すのでした。穴の底に、ブーツと白く、経帷子きようかたびらが見え、そこから生えている死人の首は、闇に溶け込んでいて、併し、それ故に、どんなに怖くも想像出来るのです。ひよつとしたら、偶然にも、彼の計画が識しんをなして、菰田がまだ本当に死んでいず、彼が墓をあばいたばかりに、生き返りつつあるのかも知れません。そんな馬鹿馬鹿しい事まで妄想されるのです。

彼は身内から込み上げて来る戦慄を、じつと圧おさえつけながら、最早殆ど空うつろの心で、穴の縁ふちに腹這はらばいになると、その底の方へ、両手をのばして、思い切って、死人の身体を探ってみました。最初触ったのは、髪を剃そった頭部らしく、一面にザラザラと細こまかい毛が感じられました。皮膚を押し見ると、妙にブヨブヨしていて、少し強く当たれば、ズルリと皮が破れ相なのです。その無気味さにハツと手を引いて、暫く胸の鼓動を沈めてから、再び手を延して、今度触ったのは、死人の口らしく、固い歯並びが感ぜられ、その歯と歯の間に咬かみ合せてあるのは、恐らく綿なのでしょう、柔かくはあつても、腐りかかった皮膚のそ

れとは違うのです。彼は少し大胆になって、猶も口の辺を探り廻っていますと、妙なことには、菰田の口は生前のその十倍もの大きさに開いていることが分りました。左右には、まるで般若はんにやの面の様に、奥歯がすっかり現われる程に裂け、上下には歯ぐきが感ぜられる程も開いています。決して暗闇故の錯覚ではないのです。

それが又、彼を心の髓から震い上らせました。何も、死人が彼の手を噛むかも知れぬという様な、そんな恐れではありません。死人の肺臓が運動を停止してからも、口丈けで、呼吸をしようと、その辺の筋肉が極度に縮んで、脣くちびるを押し開き、生きた人間では逆も不可能な程大きな口にして了つたという、その断末魔だんまつまの世にも物凄い情景が、彼の目先にチラついたのです。

前さきの人見廣介は、これ丈けの経験で、最早や精も根こんも尽き果てた感じでした。この上になお、そのズルズルに腐つた死体を穴から取り出し、取り出す丈けではなくて、それを処分する為に、更に一層恐しい、大仕事をやりとげなければならぬと思うと、彼は自分の計画が無謀極きわまるものであつたことを、今更ながらつくづくと感じないではいられませんでした。

八

前の人見廣介が、仮令巨万の富に目がくれたとは云え、あの数々の激情を耐え忍ぶことが出来たのは、恐らく、彼も亦凡ての犯罪人と同じ様に、一種の精神病者であつて、のうず脳髓いのどこかに、故障があり、ある場合、ある事柄については、神経が麻痺まひして了つたものに相違ありません。犯罪の恐怖がある水準を超えると、丁度耳に栓せんをした時の様に、ツーンとあらゆる物音が聞えなくなつて、謂わば良心が聾ろうになつて了つて、その代りには、悪に関する理智が、とぎすました剃かみそり刀の様に、異常に鋭くなり、まるで人間業ではなく、精密なる機械仕掛でもあるかと思われる程、どの様な微細な点も見逃すことなく、水の如く冷静に、沈着に、思うままを行うことが出来るのであります。

彼が今、菰田源三郎の腐りかかった死体に触れた刹せつな那、その恐怖が極点に達すると、都合よくも、又この不感状態が彼を襲むさつたのでした。彼はもう何の躊躇する所もなく、機械人形の様に無神経に、微塵みじんの手抜きてぬかりもない正確さで、次々と彼の計画を実行して行きました。

彼は、持ち上げても持ち上げても、五本の指の間から、ズルズルとくずれ落ちて行く、

菰田の死体を、一文菓子屋のお婆さんが、水の中から心ところてん太を持ち上げる様な気持で、なるべく死体を傷つけぬ様に注意しながら、やっと墓穴の外へ持ち出しました。でも、その仕事を終った時には、死体の薄皮が、まるでくらげ製の手袋の様に、ピッタリと彼の両の掌に密着して、振り落しても、振り落しても、容易に離れ様とはしないのです。平常のふだん廣介であつたら、それ丈けの恐怖で、もう十分万事を抛ほうてき擲して逃出したに相違ありません。が、彼は、さして驚く様子もなく、さて次の段取りにと取りかかるのでした。

彼は次には、この菰田の死体を、抹殺して了わねばならないのです。廣介自身を此世このよから掻き消して了うことは、比較的容易でありましたが、この一個の人間の死体を、絶対に人目にかからぬ様に始末することは、非常な難事に相違ありません。水に沈めた所で、土に埋めた所で、どうしたことで浮き上つたり、掘り出されたりしないものでもなく、若し源三郎の一本の骨でも人目にかかったなら、凡ての計画がオジャンになって了うばかりか、彼は恐しい罪名を着なければならぬのです。随つて、この点については、彼は最初の晩から、最も頭を悩まして、あれかこれかと考え抜いたのでありました。

そして結局彼の思いついた妙計というのは、難題の鍵はいつも最も手近な所にあるものです、菰田の隣の墓場へ、そこには多分菰田家の先祖の骨が眠っているのでしようが、そ

れを発掘して、そこへ菰田の死体を同居させることでした。そうして置けば、菰田家には、恐らく永久に、祖先の墓をあばく様な不孝者は生れないでしょうから、又仮令墓地の移転という様な事が起つたところで、その時分には、廣介は彼の夢を実現して、此上もない満足の中に世を去つていたのでしようし、そうでなくても、バラバラにくずれた骨が、一つの墓から二人分出て来たとして、誰れも知らない幾時代も前に葬つた仏のことです。それと廣介の悪計と、どう連絡をつけることが出来ましよう。と、彼は信じたのでした。

隣の墓を掘り返すことは、土が固つていたので、少々骨が折れましたが、汗まみれになつて、せつせと働く内には、どうやら骨らしいものに掘り当てる事が出来ました。棺かんお桶けなどは無論、跡あと形かたもなく腐つて、ただバラバラの白骨が、小さく固つているのが、星の光りでほの白く見えるばかりです。そんなになると、もう臭気とてもなく、生物の骨という感じをまるで失つて、何か清浄な、白い鉱物みたいに思われるのでした。

あばかれた二つの墓と、一個の人間の腐肉を前にして、暗やみの中で、彼は暫しばらく静止を続けました。精神を統一し、いやが上にも頭の働きを緻密にしようが為なのです。うっかりしてはいけません。どんな些細ささいな疎漏そろうもあつてはならない。彼は頭を火の玉の様にして、暗の中のおぼろな物を眺め廻しました。

暫くすると、彼は少しの感動もなく、源三郎の死体から、白布の経帷子をはぎ取り、両手の指から三本の指環をひきちぎりました。そして、経帷子で指環を小さくくくるみ、懐中にねじ込むと、足許にころがつている、素裸体の肉塊を、さも面倒臭さ相に、手と足を使って、新しく掘った墓穴の中へ、落しこんだのです。それから、四這いになつて、手の掌でまんべんなくその辺の地面を触つて歩き、どんな小さな証拠品も落ちていないことを確認すると、鍬をとつて、墓穴を元々通り埋め、墓石を立て、新しい土の上には、予め取りのけて置いた草や苔を、隙間なく並べるのでありました。

「これでよし、気の毒ながら菰田源三郎は、俺の身替りになって、永久にこの世から消去つて了つたのだ。そして、ここにいる俺は、今こそ本当の菰田源三郎になり切ることが出来た。人見廣介は、最早どこを探してもいないのだ」

前の人見廣介は、昂然として星空を仰ぎました。彼には、その闇の丸天井と、銀粉の星屑が、おもちゃの様に、可愛らしく、何か小さな声で彼の前途を祝福しているかに思いなされるのでありました。

一つの墓があばかれて、その中の死体がなくなつた。人々はこの事実丈で、十分顛倒するでありましょう。その上、そのすぐ隣のもう一つの墓があばかれたなどと、その

様な御手おてがる軽な、大胆なトリツクを弄ろうしたものがあろうなどと、誰が、どうして想像するものですか。しかも、人々のその顛倒の中へ、経帷子を着了菰田源三郎が現れようという訳です。すると、人々の注意は立所に墓場を離れて、彼自身の不思議な蘇生に集中されるでしょう。それからあとは、彼のお芝居の上手下手です。そして、そのお芝居については、彼に十二分の成算せいさんが立っているのであります。

やがて、空は少しずつ青味を加え、星屑は徐々にその光を薄くし、鶏にわとりの声があちこちに聞え始めました。彼は、その薄うす明あかりの中で、出来る丈け手早く、菰田の墓を、さも死人が蘇生そせいして、内部から棺を破つて這い出した体ていにしつらえ、足跡を残さぬ様に注意しながら、元の生垣の隙間から、外の畦道あぜみちへと抜け出し、鍬の始末をして、元の変装姿のまま、町の方へと急ぐのでした。

九

それから一時間もすると、彼は、墓場から蘇生した男が、よろよろと自宅への道をたどり、三分一も歩かぬ内に息切れがして、道ばたに行き倒れた体を装って、とある森の茂み

のかげに、土まみれの経帷子の姿を、横えて居りました。丁度一晩食わず飲まずで働き通したのですから、顔面にも適度の憔悴しょうすいが現れ、彼のお芝居を一層まことしやかに見せるのでした。

始めの計画では、死体を始末すると、すぐに経帷子に着換え、寺の庫裏くらにたどりついて、ホトホトとその雨戸を叩く予定だったのですが、死体を見ると、この地方の習慣と見え、あの古くさい剃髪ていはつの儀式によつて、頭も髭も綺麗きれいに剃られていたものですから、彼も亦同じ様に頭を丸めて置く必要があつたのです。で、彼は町はずれの田舎めいた商家の中から金物屋を探し出して、一挺の剃刀を買い、森の中に隠れて、苦心をして、自ら髪を剃らなければなりませんでした。それは例の巧みな変装を解かない前ですから、理髪店に入つたところで滅多に疑われる筈はなかつたのですけれど、早朝のことで、朝の遅い理髪店は、まだ店を開いていなかったのと、万一おもんばかを慮る用心とから、剃刀を買うことにしたのでした。

そして、すっかり頭を剃り、経帷子と着換え、死人の手から抜取つた指環をはめ、脱いだ衣類そのた其他を、森の奥の窪地くぼちで焼き捨て、その灰の始末をつけて了つた時分には、もう太陽が高く昇つて、森の外の街道には、絶えず、チラホラと人通りがして、今更ら隠れ家かくがを出て、寺に帰りもならず、止むやを得ず、見つけ出すのに骨の折れる様な、併し街道からは

余り距たらぬ、茂みの影に、氣を失つたつもりで、横わっている外はなかつたのです。

街道に沿って小さな流れがあり、その流れに枝を浸す様にして、葉の細い灌木が密生し、そこからずつと森になつて、脊の高い松や杉などが、まばらに生えているのです。彼は、往来から見えぬ様に用心しながら、その灌木の向う側に、身体をくつつける様にして、息を殺して横になっていました。そして、灌木の隙間から、街道を通る百姓達の足だけを眺めながら、氣が落ちつくに随つて、彼は又変てこな氣持になつて来るのでした。

「これですつかり計画通り運んだ訳だ。あとは誰かが俺を見つけてくれさえすればよいのだ。だが、たったこればかりのことで、海を泳いで、墓を掘つて、頭を丸めた位のことで、あの数千万円の大身代が、果して俺のものになるのかしら、話があんまり甘すぎはしないか。ひよつとしたら、俺は飛んでもない道化役を勤めているのではないかな。世間の奴らは、何もかも知つていて、態と、面白半分に知らぬ振りをしていてのではないかな」

かくして、ある激情的な場合には、まるで麻痺して了う所の、常人の神経が、少しずつ彼に甦つて来ました。そして、その不安は、やがて、百姓の子供達が、彼の狂人じみた経帷子姿を発見して、騒ぎ立てるに及んで、一層はげしいものになったのです。

「オイ、見てみい、何やら寝てるぜ」

彼等の遊び場所になつてゐる、森の中へ這入ろうとして、四五人連れの一人が、ふと彼の白い姿を発見すると、驚いて一步下つて、囁き声で、外の子供達に云うのでした。

「なんじや、あれ。狂人か」

「死人や、死人や」

「側へ行つて、見たろ」

「見たろ、見たろ」

田舎縞いなかじまの縞目も分らぬ程に、汚れて黒光りに光つた、ツンツルテンの着物を着た、十歳前後の腕白共わんぱくどもが、口々に囁き交して、おずおずと、彼の方へ近づいて来ました。

青鼻汁あおばなをズルズル云わせた、百姓面の小せがれ共に、まるで、何か珍しい見せ物でもある様に覗きこまれた時、その世にも滑稽な景色を想像すると、彼は一層不安にも、腹立たしくもなるのでした。「愈々俺は道化役者だ。まさか最初の発見者が百姓の小せがれだろうとは思つても見なかつた。これで散々さんざんこいつらのおもちゃになつて、珍妙な恥さらしを演じて、それでおしまいか」彼は殆ど絶望を感じないではいられませんでした。

でも、まさか、立上つて、子供達を叱りつける訳にも行かず、相手が何人であろうと

も、彼はやつぱり、失神者を装っている外ほかはないのです。で、段々大胆になった子供達が、しまいには、彼の身体に触りさえするのを、じつと辛抱しんぼうしていなければなりません。余りの馬鹿馬鹿しさに、一切がっさいオジヤンにして、いきなり立上って、ゲラゲラと笑い出したい感じでした。

「オイ、父とつつあんとつに云うてこ」

その内に、一人の子供が息をはずませて嘔むきました。すると、外の子供達も、

「そうしよ、そうしよ」

とつぶやいて、バタバタとどこかへ駈け出してしまいました。彼等は銘々の親達に、不思議な行倒ゆきだおれ人のことを報告しに行つたのです。

間もなく、街道の方から、ガヤガヤと人声が聞えて、数名の百姓が駈けつけ、口々に勝手なことをわめきながら、彼を抱き上げて介抱かいほうし始めました。噂を聞きつけて、段々人が集り、彼のまわりを黒山の様に取囲んで、騒ぎは段々大きくなるのです。

「ア、菰田の旦那だんなやないか」

やがて、その中に、源三郎を見知っているものがあつたと見え、大声に叫ぶのが聞えました。

「そうや、そうや」

二三の声がそれに応じました。すると、多勢おおぜいの中には、もう菰田家の墓地の変事を聞知っているものもあつて、「菰田の旦那が墓場から甦つたわつた」というどよめきが、一大奇蹟として、田舎人の口から口へと、伝つたわつて行くのでありました。

菰田家といえは、T市の附近では、いやM県全体に亙わたつて、所の自慢になつている程の、県下随一の大資産家です。その当主が一度葬られて、十日もたつてから、棺桶を破つて生返つて来たとあつては、彼等にとつては、驚倒的な一大事変に相違ありません。T市の菰田家に急を知らせるもの、お寺に走るもの、医者に駆けつけるもの、野らも何もうっちゃらかして、殆ど村人総出の騒さわぎなのです。

前さきの人間見廣介は、やつと彼の仕事の反応を見ることが出来ました。この分なれば、彼の計画は満更夢まんぎらに終ることもないようです。そこで、彼は愈々、得意のお芝居を演じる時が来たのでした。彼は衆人環視しゅうじんかんしの中で、さも今気がついたという風に、先ずパツチリと眼を開いて見せました。そして、何が何だか訳が分らぬという面持おももちで、ぼんやりと人々の顔を見廻すのでした。

「ア、お氣がついた。旦那さん、お氣がつかしましたか」

それを見ると、彼を抱いていた男が、彼の耳の側へ口を持って来て、大声に怒鳴りました。それと同時に、無数の顔の壁が、ドツと彼の上に倒れかかって、百姓達の臭い息が、ムツと鼻をつくのです。そして、そこに光っている夥しい眼の中には、どれもこれも、朴ぼ訥くつな誠意があふれて、微塵でも、彼の正体を疑うものはありません。

が、廣介は、相手の如何いかんに拘らず、予め考えて置いた、お芝居の順序を換えようとはせず、ただ黙って、人々の顔を眺める仕草しくさの外には何の動作も、一言いちごんの言葉も発しないのでした。そうして、凡ての見極めをつけるまでは、意識の朦朧もうろうを装って、口を利く危険をさけようとしたのです。

それから、彼が菰田家の奥座敷へ運び込まれるまでのいきさつは、くたくだしくなりますから、省くことにしますが、町からは菰田家の総支配人其他の召使、医者などをのせた自動車が駈けつけ、菩提寺からは和尚おしょうや寺男が、警察からは、署長を始め二三の警官が、その他急を聞いた菰田家縁故の人々は、まるで火事見舞かなんどの様に、次から次へと、この町はずれの森を目かけて集まって来る始末でした、附近一帯は、戦争の騒ぎで、これを見ても、菰田家の名望、勢力の偉大なことが、十分に察せられるのであります。

彼は、それらの人々に擁ようせられて、今は彼自身の家うちであるところの、菰田邸につれて行

かれる間、それから、その主人の居間の、彼が嘗て見たこともない様な立派な夜具の中に横つてからも、最初の計画を確く守つて、唾者の如く口をつぐんだまま、遂に一言も物を云おうとはしませんでした。

十

彼のこの無言の行は、それから約一週間というもの、執拗に続けられました。その間に、彼は床の中から、耳をそばだて、目を光らせて、菰田家の一切の仕来り、人々の気風、邸内の空気を理解し、それに彼自身を同化させることを努めたのです。外見は半ば意識を失つた、半死半生の病人として、身動きもせず床の中に横わりながら、彼の頭丈だけは、妙な例ですけれど、五十哩の速力で疾駆する自動車の運転手の様に、機敏に、迅速に、しかも正確に、火花を散らして廻転していました。

医師の診断は、大体彼の予期していた様なものでありました。それは菰田家御出入の、T市でも有数の名医だということでしたが、彼は、この不可思議なる蘇生を、カタレプシという曖昧な術語によつて、解決しようと思いました。彼は死の断定が如何に困難なもの

であるかを、様々の実例を挙げて説明し、彼の死亡診断が決して粗漏そろうでなかつたことを弁明しました。

彼は、眼鏡越しに、廣介の枕頭ちんとうに並んだ親族達を見廻して、癲癩とカタレプシの関係、それと仮死の関係等を、むずかしい術語を使って、くどくどと説明するのでした。親族達はそれを聞いて、よく分らないなりに、満足していた様です。本人が生返つたのですから、仮令その説明が不十分であろうとも、別段文句を云う筋はないのでした。

医師は不安と好奇心の入混つた表情で、丁寧に廣介の身体を検べました。そして、何もかも分つた様な顔をして、その実うまうまと廣介の術中に陥つていたのでした。此場合、この医師は彼自身の誤診ということで、心が一杯になり、その弁明にのみ気をとられて、患者の身体に多少の変化を認めても、それを深く考えている余裕はないのでした。又仮令廣介が廣介を疑うことが出来たとしても、それが源三郎の替玉であろうなどと、その様な途方もない考が、どうして浮びましよう。一度死んだものが蘇生する程の大変事が起つたのですから、その蘇生者の身体に何かの変化が見えた所で、さして不思議がることはない。と、専門家にした所で、そんな風に考えるのは、決して無理ではないのです。

死因が発作的の癲癩（医者はそれをカタレプシと名附けたのですが）だものですから、

内臓にはこれという故障もなく、衰弱といつても知れたもので、食事なども、ただ營えい養ように注意すればそれでよいのでした。随つて廣介の仮病は、精神の朦朧を装い、口をつぐんでいる外には、何の苦痛もなく、極めて楽なものでありました。それにも拘らず、家人の看病は、実に至れり尽せりで、医師は毎日二度ずつ見舞いに来ますし、二人の看護婦と、小間こまつかい使とは枕頭につき切りですし、角田つのだという総支配人の老人や、親族達はひつ切りなしに様子を見にやつて来ます。それらの人が、皆声をひそめ、蹙音こつげいを盗んで、さも心配相にふるまつているのが、廣介にしては、馬鹿馬鹿しく、滑稽こつげいに見えて仕様がなないのです。彼は、これまでしかつめらしく考えていた世の中というものが、まるでたわいのない、子供のままごと遊びに類似したものであることを痛感しないではいられませんでした。自分丈だけが非常に偉く見えて、外の菰田家の人達は、虫けらの様に下らなく、小さなもの思おもわれるのでした。「ナアんだ、こんなものか」それは寧ろ失望に近い感じでした。彼は、この経験によつて、古来の英雄とか、大犯罪者などの、思い上つた心持を、想像することが出来た様に思いました。

併し、その中にも、たつた一人、多少薄気味が悪く、苦手とでもいうのでしようか、何となく彼を不安にする人物があつたのです。それは、外でもない、彼自身の細君、正しく

云えば亡き菰田源三郎の未亡人でありました。名前は千代子ちよこといって、まだ二十二歳の謂わば小娘に過ぎないのですけれど、色々な理由から、彼はその女を恐れないではいられないのでした。

菰田の夫人が、まだ若くて美しい人だことは、以前にもT市へやって来て、一応は知っていたのですが、それが、毎日見ているに従って、俗に近まちかまりと云う、あの型に属する女と見え、段々その魅力を増して来るのです。当然彼女は一番熱心な看病人でしたが、その痒い所かゆへ手のとどく看護振りから、亡き源三郎と彼女との間が、どの様に濃こまやかな愛情を以て結びつけられていたのかを十分推察することが出来るのです。それだけに、廣介としては、一種異様の不安を感じないではいられません。「この女に気をゆるしてはならない。恐らく、俺の事業に取って、最大の敵はこの女に相違ない」彼は、ある刹那には歯を食いしぼる様にして、自分自身を戒いましめなければならなかったのです。

廣介は、源三郎としての彼女との初対面の光景を、其後長い間忘れることが出来ませんでした。経帷子姿の彼をのせた自動車が、菰田家の門前につくと、千代子は誰かに止められてでもいたのでしょう、門から外へはよう出ずに、余りの椿事ちんじに、寧ろ顛倒てんどうしてつって、歯の根も合わずワクワクしながら、門内の長い敷石道を、やっぱり青くなつた小間使

達と一緒に、ウロウロと歩き廻っていたのですが、自動車の上の廣介を一目見ると、何故か一瞬間ハツと驚愕きょうがくの表情を示し、（彼はそれを見て、どの様に胆きもを冷したことでしよう）それから、子供の様な泣顔になつて、自動車が玄関につく迄までの間を、無様な恰好むさまで、車の扉によりかかつて、引ずられる様に走つたのです。

そして、彼の身体が、玄関に担かつぎ卸おろされるのを待兼ねて、その上にすがりつき、長い間、親戚の人達が見兼ねて、彼女を彼の身体から引離したまで、身動きもせず泣いていました。その間、彼はぼんやりした表情を装つて、睫毛まつげを一本一本算かぞえることが出来る程も、目の前に迫つた彼女の顔を、その睫毛が涙にふくらみ、熟し切らぬ桃の様に青ざめた、白い生毛うぶげの光る頬の上を、涙の川が乱れて、そして、薄桃色の滑なめらかな唇が、笑う様に歪ゆがむのを、じつと見ていなければなりません。そればかりではありません。彼女のあらゆる二の腕が、彼の肩にかかり、脈打つ胸の丘きゅうりょう陵が、彼の胸を暖め、个性的なほのかなる香気までも、彼の鼻をくすぐるのでした。その時の、世にも異様な心持を、彼は永久に忘れることが出来ません。

廣介の千代子に対する、名状することの出来ない、一種の恐怖は、日をふるにつれて深まつて行きました。

彼が床につき切りでいた、一週間の内にも、恐るべき危機は、幾度となく彼を襲つたのです。例えば、それはある真夜中のことでしたが、廣介が、悩ましい悪夢にうなされて、ふと目を開きますと、悪夢の主は、次の間に寝ていたのが、いつ彼の部屋へ入つて来たのか、艶かしき寝乱髪なまめを、彼の胸にのせて、つつましやかなすすり泣きを、続けているのであります。

「千代子、千代子、何もそんなに心配することはないのだよ。私はこの通り、身も心もすこやかな、今まで通りの源三郎なのだ。さあ、さあ泣くのをよして、いつもの可愛い笑い顔を見せておくれ」

彼は、ふとそんなことを口走り相になるのを、やつとの思いで食いしめて、そしらぬ振りたぬきねいで、狸寐入たぬきねいりをしていなければならぬのです。この様な不思議な立場は、流石の廣介も、嘗てかつ予期しない所でした。

それは兎も角、彼は予定の筋書きに従つて、四五日目頃から、極めて巧みなお芝居によ

つて、少しずつ、口を利き始め、激動の為に一時麻痺していた神経が、徐々に目覚めて来る有様を、ごく自然に演じて行きました。その方法は、数日の間床の中にいて、見たり聞いたりしたこと、又はそれから類推し得た所丈けを、やっと思い出した体に装つて、その外の、まだ探り得ない多くの点には態と触れない様にし、相手がそれを話し出すと、顔をしかめて、どうも思い出せないという風をして見せるのです。彼はこのお芝居を自然らしくする為に、予め数日の間、苦しい思いをして口をつぐんでいたのですが、それが図に當つて、仮令分り切つたことを胸どうわす忘れしていても、或は話がとんちんかんになつても、人は少しも疑わず、却つて彼の不幸な精神状態を、憐あわれんで呉れる始末でした。

彼はそうして、偽阿房にせあほうを装いながら、失敗する度に何かしら覚おぼえ込む方法によつて、瞬またたく内に、菰田家内外の、種々さまざまの關係に通つうぎよう曉あやすることが出来ました。そこで、これなれば先ず大丈夫という、医師の折紙がついて、丁度彼が菰田家に入つてから半月目には、もう盛大な床上げとこのお祝いが開かれることになつたのです。その酒宴の席でも、彼は、そこに集つた親族、菰田家に属する各種事業の主腦者、総支配人を始め重おもだつた雇人などの、氣をゆるした雑談の裏うちから、夥しい知識を得ることが出来たのですが、さて、そのお祝いの翌日から、彼は愈々いよいよ、彼の大理想の実現に向つて、その第一歩を踏み出す決心をした

のでした。

「私もまあ、どうやら元の身体になることが出来た様だ。ついては、少し思う仔細もあるので、此際このさい私の配下に属する色々な事業や、私の田地でんち、私の漁場などを、一巡して見たいと思う。そして、私のぼやけた記憶をハッキリさせ、その上で、菰田家の財政について、もう少し組織立った計画を立てて見ようと思うのだ。どうか、一つその手配をしてくれ給たまえ」

彼は早朝から、総支配人の角田を呼び出して、この様な意嚮いこうを伝えました。そして、即日、角田と二三の小者を従えて、県下一円に散在する、彼の領地へと旅立つのでした。角田老人は、これまではどちらかと云えば、引込み思案であつた主人の、この積極的なやり口に、目を丸くして驚きました。そして、一応は、身体に触るといけないからといって、いさめたのですけれど、廣介のいっかつ一喝いっかつにあつて、たちまちひと一すくみになり、唯々いとして主命に服する外はありませんでした。

彼の視察旅行は、大急ぎで廻り歩いたのですけれど、それでもたつぷり一月を費しました。その一月の間に、彼は彼の所有に属する、涯はてし知れぬ田野、人も通わぬ密林、広大なる漁場、製材工場、鰹かつおぶし節工場、各種の罐詰かんづめ工場、其他半ば菰田家の投資になる様々の

事業を巡視して、今更らながら、彼自身の大身代にいっきょう一驚を喫きつしないではいられません
でした。

彼がこの旅行によつて、何を観察し、何を感じたか、その詳しいことは、一々ここに記
す暇を持ちませんが、兎も角、彼の所有財産は、嘗て角田老人が見せて呉れた、帳簿面の
評価額通り、いやそれ以上にも、充実したものであることを、十分確めることが出来たの
でした。

彼は行く先々で、下へも置かぬ款待かんだいを受けながら、それらの不動産なり、営利事業な
りを、どうすれば、最も有利に処分し、換金することが出来るか、その処分の順序は、ど
れを先きにし、どれを後にすれば、最も世間の注意を惹かないで済むかとか、どの工場の
支配人は手強てごわ相だとか、どの山林の管理人は少し低脳らしいとか、だからあの工場より
はこの山林の方を先に手離すことにしようとか、附近にその売りに出るのを待っている
様な、山林経営者はないだろうかとか、其そのよう様な点について、彼は様々に心をくだくので
ありました。それと同時に、彼は旅の道連れの心安きを幸いに、角田老人と仲好なかよしになる
ことに全力を傾け、遂には、財産処分の相談相手とまで、彼の心を柔げることに成功した
のでありました。

そうして旅を続けている内に、廣介はいつとはなく、何の作為を加えずとも、生れつきの千万長者、菰田源三郎になり切つて行くのでした。彼の事業の管理者達は、一も二もなく、彼の前に叩頭して、疑いのけぶりさえ見せませんし、地方地方の縁故のもの、旅館などでは、まるで殿様を迎える騒ぎで、彼の顔を見つめる様な、無躰なものは一人もありませんし、それに時々は、亡き源三郎の顔馴染の芸妓などから、「お久し振りでございますね」などと、肩を叩かれますと、彼はもう益々大胆になつて、大胆になればなる程、お芝居が板について、今では、正体を見現されはしないかという心配などは、殆ど忘れた形で、彼が嘗て、人見廣介と名のる貧乏書生であつたことは、その方が却て嘘の様な気さえするのであります。

この驚くべき境遇の変化は、彼を無上に嬉しがらせたことは申すまでもありませんが、その感じは、嬉しいというよりは、一そ馬鹿馬鹿しく、馬鹿馬鹿しいというよりは、何となく胸がからつぽになつた様な、雲に乗つて飛んでいる様な、夢を見ている様な、一方では限りなき焦燥を感じながら、一方では落付きはらつている様な、何とも形容の出来ない心持でありました。

こうして、彼の計画は着々として進むのですが、悪魔は、彼の予期し防備していた側

には現れないで、その裏の、流石の彼もそこまでは考えていなかった方面に、おぼろな姿を段々はつきりさせながら、じりじりと、彼の心に喰入って来るのでありました。

十二

あらゆる款待の内に、満悦の旅を続けながらも、廣介は、ともすれば、恐れと懐^{なつか}しさの入混った感情で、邸に残した千代子の姿を、心に思い描くのでした。あの泣きぬれた生毛^{うぶげ}の魅力が、悩ましくも、彼の心を捉え、私^{ひそ}かに覚えた、彼女の二の腕のほのかなる感触が、夜毎の夢となつて、彼の魂^{おのの}を戦^{たたか}かせるのでありました。

千代子は源三郎の女房であつて見れば、彼女を愛するのは、今や源三郎となつた廣介にとつて当然の事でもあり、彼女の方でも、無論それを求めているのでしようが、その様に易々^{やすやす}と叶^{かな}う願^{ねが}いであるだけに、廣介にとつては、一層苦しく悩ましく、一夜^{のち}の後^{のち}にどの様な恐^{おそ}しい破綻^{はたん}が起^{おこ}らうとも、身も心も、彼の終生の夢さえも、彼女の前に抛^なげ出して、いつそのまま死^しのうかと、そんな無分別な考えを抱^{かか}く様にもなるのでした。

でも、彼の最初からの計画によれば、まさか千代子の魅力が、これ程悩ましく彼の心に

食入ろうとは、想像もしていなかったものですから、万一の危険を慮って、千代子は名前丈の妻にして、なるべく彼の身边から遠ざけて置く予定だったのです。それは、彼の顔や姿や声音こゝねなどが、どの様に源三郎に生写いきうつしであろうとも、それで以って、源三郎じつこ呢ね懇の人々を欺あざむきおおせようとも、舞台の衣裳を脱ぎ捨てて扮装を解いた閨房けいぼうに於いて、赤裸せきらら々の彼の姿を、亡き源三郎の妻の前に曝さらすのは、どう考え直しても、余りに無謀なことでだからです。千代子は、きつと源三郎のどんな小さな癖も、身体の隅々の特徴も、掌を指す様に知り尽していることでしょう。随って、廣介の身体のどこかの隅に、少しでも源三郎と違つた部分があつたなら、立所に彼の仮面ははがれ、それが因もとになつて、遂には彼の陰謀がすっかり曝露ばくろしないものでもないのです。

「お前は、それがどれ程優れた女であろうと、たつた一人の千代子の為に、お前の年来抱いていた大きな理想を捨てて了うことが出来るのか。若しその理想を実現することが出来たなら、そこには、一婦人の魅力などは、比べものにもならぬ程、強く烈はげしい陶醉とうすいの世界が、お前を待受けているのではないか。まあ考えて見るがいい。お前が日頃まほろ幻しに描いている、理想境の、たつた一部分丈でも思おも出いだして見るがいい。それに比べては、一人と一人の人間界の恋などは、余りに小さな取るにも足らぬ望みではないか。眼先めさきの迷いに

駆られて、折角の苦勞を水の泡にしてはいけない。お前の慾望はもつともつと大きかった筈ではないのか」

彼はそうして、現実と夢との境に立つて、夢を捨てることは勿論出来ないけれど、いつて、現実の誘惑は余りに力強く、二重三重のデレンマに陥り、人知れぬ苦悶を味わねばなりませんでした。

が、結局は、半生の夢の魅力と、犯罪発覚の恐怖とが、千代子を断念させないでは置かなかつたのです。そして、その悲しみをまぎらす為に、千代子の物淋しげな、憂い顔を、彼の脳裏からかき消す為に、それが本来の目的でもあるかの如く、彼はひたすら、彼の事業に没頭するのであります。

巡視から帰ると、彼は先ず最も目立たぬ株券の類を、私かに処分せしめて、それを以て理想境建設の準備に着手しました。新しく傭い入れた画家、彫刻家、建築技師、土木技師、造園家などが、日々彼の邸につめかけ、彼の指図に従つて、世にも不思議な設計の仕事が始められました。それと同時に一方では、夥しい樹木、花卉、石材、ガラス板、セメント、鉄材、等の註文書が、或は註文の使者が、遠くは南洋の方までも送られ、夥多の土方、大工、植木職などが続々として各地から召集されました。その中には、少数の電気職工だと

か、潜水夫だか、舟大工なども混っていたのです。

不思議なことは、その頃から、彼の邸に小間使とも女中ともつかぬ若い女共が、日毎に新しく傭入れられ、暫くすると、彼女等の部屋にも困る程に、その数を増して行くのでした。

理想境建設の場所は、幾度とない模様替えの後、結局、S郡の南端に孤立する沖の島と決定され、それと同時に、設計事務所は、沖の島の上に建てられた急造のバラックへと移転し、技術者を始め、職人、土工、それにえたいの知れぬ女達も、皆島へ島へと移されました。やがて、註文の諸材料が次々と到着するに従って、島の上には、愈々異様な大工事が始まったのです。

菰田家の親族を始め、各種事業の主腦者達は、この暴挙を見て黙っている筈はありません。事業が進捗するに従って、廣介の応接間には、設計の仕事にたずさわる技術者達に立混つて、毎日の様に、それらの人々が詰めかけ、声を荒らだて、廣介の無謀を責め、えたいの知れぬ土木事業の中止を求めたのであります。が、それは廣介がこの計画を思い立つ最初に於て、已に予期していた所なのです。彼はその為には、菰田家の全財産の半ばを抛つ覚悟を極めていたのです。親族といつても皆菰田家よりは目下のものばかりで、

財産なども格段の相違があるのですから、止むを得ない場合には、惜しげもなく巨額の富を別け与えることによつて、訳もなく彼等の口を緘かんすることが出来たのです。

そして、あらゆる意味で戦鬪の一年間が過ぎ去りました。その間に、廣介がどの様な辛苦んくをなめたか、幾度事業を投げ出そうとしては、からくも思い止つたか、彼と妻の千代子の関係が如何に救い難き状態に陥つたか、それらの点は物語の速度を早める上から、凡て読者諸君の想像に任せて、之これを要するに、凡ての危機を救つてくれたものは、菰田家に蓄積された無尽蔵の富の力であつた。金力の前には、不可能の文字がなかつたのだといふことを申上げるに止めて置きましょう。

十三

併しながら、あらゆる難関を切抜けて凡ての人々を緘かん黙もくせしめた所の、菰田家の巨万の富も、ただ一人、千代子の愛情の前には、何の力をも持ちませんでした。仮令彼女の里方は廣介の常套じょうとう手段によつて、懐柔かいじゆうせられたとしても、彼女自身の遣り場やばのない悲しみは、どう慰めようすべもないのでありました。

彼女は、蘇生以来の、夫の氣質の不思議な変り方を、この謎の様な事実を、解くすべもなく、ただ告げる人もない悲しみを、じつとこらえている外はありませんでした。

夫の暴挙によつて、菰田家の財政が危険に瀕ひんしていることも、無論気がかりでありましたけれど、彼女にしては、そんな物質上の事柄よりは、ただもう、彼女から離れて了つた夫の愛情を、どうすれば取戻すことが出来るか、何故なれば、あの出来事を境にして、それまではあれ程烈しかった夫の愛情が、突然、人の変つた様にさめ切つて了つたのであらう。と、そのみを、夜となく昼となく思い続けるのでありました。

「あの方が、私を御覧なさる目の中には、ぞつとする様な光が感じられる。けれど、あれは決して私をお憎しみになつてゐる目ではない。それどころか、私はあの目の中に、これまでついぞ見なかつた、初恋の様に純粹な愛情をさえ感じることが出来るのだ。なのに、それとは全くあべこべな、私に対するあのつれない仕向けは、一体全体どうしたというのだろう。それは、あんな恐しい出来事があつたのだから、氣質にしろ、體質にしろ、以前と違つて了つたとて、少しも怪しむ所はないのだけれど、此頃の様に、私の顔さえ見れば、まるで恐しい者が近づいて来でもした様に、逃げよう逃げようとなさるのは、全く不思議に思わないではいらぬ。そんなに私をお嫌いなら、一思いに離別なすつて下さればよい

ものを、そうはなさらないで、荒い言葉さえおかけなさらず、どんなにお隠し遊ばしても、目丈だけは、いつでも、私の方へ飛びついて来る様に、不思議な執着を見せていらっしやるのだもの、ああ、私はどうすればいいのだろう」

廣介の立場もさることながら、彼女の立場も亦、実に異様なものと云わねばなりませんでした。それに、廣介の方には、事業という大きな慰藉いしやがあつて、毎日多くの時間をその方に没頭していればよいのですが、千代子にはそんなものはなくて、却つて、里方から、夫の行蹟ぎようせきについて、なんのかのと妻としての彼女の無力を責めて来る、それ丈けでも十分うんざりさせられる上に、彼女を慰めて呉れるものと云つては、里方から伴つて来た年よつた婆ばあやの外には、夫の事業も、夫自身さえも、まるで彼女とは没交渉で、その淋しさ、やるせなさは、何に比べるものもないのでした。

廣介には、云うまでもなく、この千代子の悲しみが、分り過ぎる程分つていました。多くは、沖の島の事務所に寝泊りをするのですが、時たま邸に帰つても、妙に距へだてを作つて、打ちつけて話合うでもなく、夜なども、殊更ことごとら部屋を別にして寝むやす様な有様でした。すると、大抵の夜は隣の部屋から、千代子の絶え入る様な忍び泣きの氣勢けはいがして、でも、それを慰める言葉もなく、彼も亦、泣き出したい気持になるのがお極りなのです。

仮令陰謀の暴露を恐れたからとは云え、この世にも不自然な状態が、やがて一年近くも続いたのは、誠に不思議と云わねばなりません。が、この一年が、彼等にとつての最大限でありました。やがて、ふとしたきっかけから、彼等の間に、不幸なる破綻の日がやって来たのです。

その日は、沖の島の工事が、殆ど完成して、土木、造園の方の仕事が一段落をつげたと
いうので、重だつた関係者が菰田邸に集り、一寸した酒宴を催したのですが、廣介は、愈々彼の望みを達する日が近づいたというので、有頂天にはしやぎ廻り、若い技術者達もそれに調子を合せて騒いだものですから、お開きになつたのはもう十二時を過ぎていました。町の芸者や半玉なども数名座に侍つたのですが、彼女等もそれぞれ引取つて了い、客は菰田邸に泊るものもあれば、それから又どこかへ姿を隠すものもあり、座敷は引汐の跡の様で、杯盤の乱れた中に一人酔いつぶれていたのが廣介、そして、それを介抱したのが彼の妻の千代子だつたのです。

その翌朝、意外にも、七時頃にもう起き出でた廣介は、ある甘美なる追憶と、併し名状すべからざる悔恨とに、胸をとどろかせながら、幾度も躊躇したのち、跽音を盗む様にして千代子の居間へ入つたのでした。そして、そこに、青ざめて身動きもせず坐つたまま、

唇をかんで、じつと空を見つめている、まるで人が違ったかと思われる、千代子の姿を発見したのです。

「千代、どうしたのだ」

彼は内心では、殆ど絶望しながら、表面は、さあらぬ体で、こう言葉をかけました。併し、半ば彼が予期していた通り、彼女は相変らず空を見つめたまま、返事をしようともせぬのです。

「千代……」

彼は再び、呼びかけようとして、ふと口をつぐみました。千代子の射る様な視線にぶつかったからです。彼は、その目を見ただけで、もう何もかも分りました。果して、彼の身体には、亡き源三郎と違った、何かの特徴があつたのです。それを千代子は昨夜発見したのです。

ある瞬間彼女がハツと彼から身を引いて、身体を堅くしたまま、死んだ様に身動きをしなくなつたのを、彼はおぼろげに記憶していました。その時彼女はあることを悟つたのです。そして、今朝からも、彼女はあの様に青ざめて、その恐しい疑惑を段々ハツキリと意識していたのです。彼は最初から、彼女をどんなに警戒していたでしょう。一年の長い月

日、燃ゆる思いをじつと嘯^かみ殺して、辛抱しつづけていたのは、皆この様な破綻を避けた
いばかりではなかったのですか。それが、たった一夜の油断から、とうとう取返しのか
ぬ失策を仕出かして了うとは。もう駄目です。彼女の疑惑はこの先、徐々に深まろうとも
決して解けることはないでしょう。それを彼女が彼女一人の胸に秘めていて呉れるなら、
さして恐しいこともないのですが、どうして彼女が、謂わば真^{ほん}実^{とう}の夫の敵^{かたき}、菰田家の横
領者を、このままに見逃して置くものですか。やがては、このことが其^{その}筋^{すじ}の耳に入るで
しょう。そして、腕利きの探偵によつて、それからそれへと調べの手を伸ばされたなら、
いつかは真相が暴露するのは、極り切ったことなのです。

「いくら酒に酔っていたからと云つて、お前は何という取返しのかかぬことをして了つた
のだ。この処置をどうつけようというのだ」

廣介は悔^くんでも悔^くんでも悔み足りない思いでした。

そうして、彼等夫妻は、千代子の部屋に相對したまま、双方とも一ことも口を利かず、
長い間睨^{にら}み合っていました。遂に千代子は恐れに耐えぬものの如く、

「済みませんが、わたくし、ひどく気分が悪うございます。どうか、このまま一人ぼっち
にして置いて下さいまし」

やつとこれ丈けのことを云うと、いきなりその場へ突俯つっぶして了うのでした。

十四

廣介が、千代子殺害の決心をしたのは、そのことがあつてから、丁度四日目でありました。

千代子は一時はあれ程までも彼に敵意を抱きましたが、よくよく考え直せば、仮令どの様な確証を見たからと云つて、それなれば、あの方が源三郎でないとしたら、一体全体この世の中に、あんなにもよく似た人間があり得るのでしょうか。それは、広い日本を探し廻れば、全く同じ顔形の人がいらないとは限りませんけれど、そんな瓜二つの人が仮りにいたところで、その人が丁度源三郎の墓場から甦よみがつてくるなんて、まるで手品か魔法の様な器用な真似が出来るとも思われません。「これは、ひよつとしたら、私の恥しい思い違ちがいではないかしら」と考えると、あの様なはしたないそぶりを見せたことが、夫に対して申もしわけない様にも思われて来るのです。

併し、又一方では、蘇生以来、夫の氣質の激変、沖の島のえたいの知れぬ大工事、彼女

に對する不思議な隔意かくい、そして、あののつぴきならぬ確かな証拠しやうこと並べ立てて考えますと、やっぱりどこやら疑わしく、これは、一人でくよくよしていないで、一いっそのこと誰かにすつかり打うち開けて、相談して見た方がよくはないかしら、などとも思われるのでありました。廣介は、あの夜以来、心配の余り、病氣と称して邸ひきこもに引籠ひきこもつたまま、島の工事場へも行かず、それとなく、千代子の一挙一動を監視して、彼女の心の動きをば、大体見てとることが出来ました。そして、この調子なればと一安心はしたものの、併し、そののちというものは、彼の身の廻りのこと一切を、小間使にまかせて、彼女は一度も彼の側そばによるうとせず、ろくろく口も利かない有様を見ますと、やっぱり油断がならず、どうかした調子で、あの秘密が外部に洩れたなら、いやいや、仮令外部には洩れずとも、そういう間にも、邸内の召使などに知れ渡っているかも知れたものではない、と思うと、愈々気がでなく、四日の間躊躇ちゆうちゆうに躊躇ちゆうちゆうを重ねた上、彼は遂に、彼女を殺害することに心を極めたのでありました。

さて、その日の午後、彼は千代子を彼の部屋に呼びよせて、さも何気ない風を装いながら、こんな風に切り出すのでした。

「身体の工く合あもいい様だから、私はこれから又島へ出掛け様と思うが、今度はすつかり工

事が出来上つて了うまで帰れまいと思う。で、その間、お前にもあちらへ行つて貰つて、島の上で暫く一緒に暮りたいのだが、どうだ少し気晴しに出掛けて見ては。それに、私の不思議な仕事も、もう大体は完成しているのだから、一度お前に見せたくもあるのだ」

すると千代子は、やつぱり疑深い様子うたがいを改めないで、何のかのと口実を構えては、彼の勧めを拒こばもうとばかりするのです。彼はそれを、或はすかし、或はおどし、色々に骨折つて、三十分ばかりの間も、口を酸すっぱくして口説くどいた上、とうとう、半ば威圧的に、彼女を肯うなずせて了いました。それと云うのも、彼女は廣介を疑い恐れながら、もう一つの心では、それが仮令源三郎でなかうと、やつぱり彼に、愛着を感じていたからに相違ありません。さて、行くとなつても、それから又、婆やを同伴するとかしなやか一問答あつた末、結局、それも同伴しないで、彼と千代子と二人切りで、その日の午後の列車に乗ることに話を極めて了つたのです。尤も誰を同伴しないでも、島へ行けば、そこに沢山の女共もいることですから、何不自由がある訳ではないのでした。

海岸を一時間も汽車にゆられると、もうそこが終点のT駅で、そこから用意のモーター船にのり、荒波を蹴つて、又一時間も行くと、やがて、目的の沖の島です。

千代子は、久しぶりの夫との二人旅を、何とも知れぬ恐怖を以て、併し又一方では、不

思議な楽しさをも感じながら、どうかこの間の晩のことは私の思い違いであつて呉れます様にと祈るのでした。嬉しいことには、汽車の中でも、船の上でも、いつになく夫は妙に優しく、言葉数が多く、何くれと彼女の世話をやいたり、窓の外を指さしては、過ぎ去る風景を賞したり、それが彼女には嘗ての密^{みつげつ}月の旅を思い起させた程も、異様に甘く懐しく感じられるのでした。随つて、あの恐しい疑いも、いつしか忘れるともなく忘れた形で、彼女は仮令明日はどうなろうと、ただ、この楽しみを一時^{いちじ}でも長引かせたいと願うばかりでありました。

船が沖の島に近づくと、島の岸から二十間も隔たった所に、非常に大きなブイの様なのが浮いていて、船はそれに横づけにされるのです。ブイの表面は、二間四方位の鉄張りで、その中央に船のハッチの様な、小さな穴が開^あいています。二人は船から歩みを渡つて、そのブイの上に降り立ちました。

「ここからもう一度、よく島の上を見てごらん。あの高く岩山の様に聳^{そび}えているのは、みんなコンクリートで拵^{こしら}えた壁なのだよ。外から見ると、島の一部としか思われぬけれど、あの内部には、それはすばらしいものが隠されているのだ。それから、岩山の上に頭を見せている、高い足場があるだろう。あれ丈けがまだ出来上らないで、今工事中なのだ、

あすこには、恐しく大きな、ハンギング・ガーデンというのだが、つまり天上の花園が出来る訳なのだ。それでは、これから私の夢の国を見物することにしよう。少しも怖いことはありやしない。この入口を降りて行くと、海の底を通つて、じきに島の上に出られるのだよ。さあ、手を引いて上げるから、私のあとについておいで」

廣介は優しく云つて、千代子の手をとりました。彼とても、千代子と同じ様に、二人が手に手をとつて、この海の底を渡るのが、何となく嬉しいのです。いずれは彼女を手にかけて殺害せねばならぬと思ひながらも、それ故に彼女の和肌やわはだの感触が一層いとしくも懐しくも思ひなされるのであります。

ハッチを入つて、暗い縦穴を五六間も下ると、普通の建物の廊下位の広さで、ずっと横にトンネルの様な道が開けています。千代子はそこへ降りて、一步進むか進まぬに、思わずアツと声を立てないではいられませんでした。そこは実に、上下左右とも海底を見通すことの出来る、ガラス張りのトンネルであつたのです。

コンクリートの枠に厚い板ガラスを張りつめて、その外部に、強い電燈がとりつけられ、頭の上も、足の下も、右も左も、二三間の半径で、不思議な水底みなそこの光景が、手に取る様に眺められます。ヌメヌメとした黒い岩石、巨大な動物の鬣たてがみの様に、物凄く揺れる様々の

海草、陸上では想像も出来ない、種々雑多の魚類の游泳、八本の足を車の様に拵げ、不気味ないぼいぼをふくらまして、ガラス板一杯に吸いついた大章魚、水の中の蜘蛛の様に、岩肌^{うごめ}に蠢く海老^{えび}、それらが強烈な電光を受けながら、水の厚みにぼかさされて、遠くの方は、森林の様に青黒く、そこにえたいの知れぬ怪物共がウジャウジャとひしめき合うかと思われて、その悪夢の様な光景は、陸上ではまるで想像も出来ない感じでした。

「どうだい、驚くだろう。だが、これはまだ入口なんだよ。これから向うの方に行くと、もつと面白いものが見られるのだよ」

廣介は、余りの気味悪さに青ざめた千代子をいたわりながら、さも得意らしく、説明するのでした。

十五

菰田源三郎になりました前の人見廣介と、その妻であつて妻でない千代子との、世にも不思議な密月の旅は、何という運命の悪戯でしょう、こうして、廣介の作り出した彼の所謂夢の国地上の樂園をさまようことでありました。

二人は、一方に於いて、限りなき愛着を感じ合いながら、一方に於いては、廣介は千代子をなきものにしようかと企らみ、千代子は廣介に対して恐るべき疑惑を抱き、お互にお互の気持を探り合つて、でも、そうしていることが、決して彼等に敵意を起させないで、不思議と甘く懐しい感じを誘うのでした。

廣介はともすれば、一旦決した殺意を思おも止とままつて、千代子との、この異様な恋に、身も心もゆだねようかとさえ、思い惑うことがありました。

「千代、淋しくはないかい。こうして私と二人つ切りで、海の底を歩いているのが。……お前は怖くはないのかい」

彼はふとそんなことを云つて見ました。

「イイエ、ちつとも怖くはありませんわ。それは、あのガラスの向うに見えている、海の底の景色は、随ずいぶん分不気味ですけれど、あなたが側にいて下さると思うと、あたし、怖くなんか、ちつともありませんわ」

彼女は、幾分あまえ気味に、彼の身近くより添つて、こんな風に答えました。いつしか、あの恐しい疑いを忘れて了つて、彼女は今、ただ目前の楽しさに酔っているのでもありませんか。

ガラスのトンネルは、不思議な曲線を描いて、蛇の様にいつまでも続きました。幾百燭し光よくこうの電燈に照されていても、海の底の淀んだ暗さはどうすることも出来ません。圧えつける様な、うそ寒い空気、遙か頭上に打ち寄せる浪の地響じびぎ、ガラス越しの蒼暗あおくらい世界に蠢く生物共、それは全くこの世の外の景色でありました。

千代子は進むに従って、最初の盲目的な戦慄が、徐々に驚異と変じ、更らに慣れて来るに従って、次には夢の様な、幻の様な、海底の細道の魅力に、不可思議なる陶醉とうすいを感じ始めていました。

電燈の届かぬ遠くの方の魚達は、その目の玉ばかりが、夏の夜の川面かわもを飛びかう螢ほたるの様に、縦横に、上下に、彗星すいせいの尾を引いて、あやしげな燐光りんこうを放ちながら、行違つていきます。それが、燈光を慕って、ガラス板に近づく時、闇と光の境を越えて、徐々に、様々の形、とりどりの色彩を、燈下に曝さらす異様な光景を何に例えればよいのでしょうか。巨大なる口を真正面に向けて、尾も鰭ひれも動かさず、潜航艇の様にスーツと水を切つて、霧の中のおぼろな姿が、見る見る大きくなり、やがて、活動写真の汽車の様に、こちらの顔にぶつつかる程も、間近く迫つて来るのです。

或は上あがり或は下さがり、右に左に屈折して、ガラスの道は、島の沿岸を数十間の間続いている

ます。上りつめた時には、海面とガラスの天井とがすれずれになつて、電燈の力を借らずとも、あたりの様子が手に取る様に眺められ、下り切つた時には、幾百燭光の電燈も、僅かに一二尺の間を、ほの白く照し出すに過ぎなくて、その彼方には地獄の闇が、涯知らず続いているのです。

海近く育つて、見慣れ聞慣れてはいても、こうして、親しく海底を旅した事などは、いうまでもなく始めてだものですから、千代子は、その不思議さ、毒々しさ、いやらしさ、それにも拘らず異様にも引入られる様な人外境の美しさ、怖い程も鮮かな海底の別世界に、ふと、名状の出来ない誘惑の様なものを感じたのは、まことに無理ではなかつたのです。彼女は、陸上で乾し固つた姿を見ては、何の感動をも起きなかつた種々様々の海草共が、呼吸し、生育し、お互に愛撫し、或は争闘し、不可解の言語を以て語り合つてさえるのを目撃して、生育しつつある彼等の姿の、余りの異様さに、身もすくむ思いでした。

褐色の昆布の大森林、嵐の森の梢がもつれ合う様に、彼等は海水の微動にそよいでいます。腐りただれて穴のあいた顔の様に、気味悪いあなめ、ヌルヌルした肌を戦かせ、無恰好な手足を藻掻く、大蜘蛛の様なえぞわかめ、水底の霸王樹と見えるかじめ、椰子の大樹にも比すべきおおばもく、いやらしい蛔虫の伯母さんの様なつるも、緑の焰と燃ゆる

青海苔、みるの大平原、それらが、所々僅かの岩肌を残して、隈もなく海底を覆い、その根の方がどの様な姿になっているのか、そこにはどんな恐しい生物が巢食っているのか、ただ上部の葉先ばかりが、無数の蛇の頭のように、もつれ合い、じゃれつき、いがみ合っています。それを蒼黒い海水の層を越し、おぼろ気な電光によって眺めるのです。

ある場所には、どの様な大虐殺の跡かと思うばかり、ドス黒い血の色に染まったあまのりの叢、赤毛の女が髪をふり乱した姿の牛毛海苔、鶏の足の形のとりのあし、巨大な赤百足かで見ゆるむかでのり、中にも一際無気味なのは、鶏頭の花壇を海底に沈めたかと疑われる、鮮紅色のとさかのりの一むら、まっ暗な海の底で、紅の色を見た時の物凄さは到底陸上で想像する様なものではないのです。

しかも、そのドロドロの、黄に青に赤に、無数の蛇の舌ともつれ合う異形の叢をかき分けて、先にも云った幾十幾百の螢が飛びかい、電燈の光域に入るに従って、夫々の不可思議な姿を、幻燈の絵の様に現します。猛悪な形相の猫鮫、虎鮫が、血の気の失せた粘膜の、白い腹を見せて、通り魔の様にす早く眼界を横ぎり、時には深鰐の目をいからせてガラス壁に突進し、それを食い破ろうとさえします。その時のガラス板の向側に密着した彼等の貪婪なる分厚の脣は、丁度婦女子を脅迫するならず者の、つばきに汚れ、

ねじれ曲つたその様で、それから来るある聯想に、千代子は思わず震い上つた程でした。

小鮫の類を海底の猛獸に例えるなら、そのガラス道に現れる魚類としては、などは、水に棲む猛鳥にも比すべく、穴子、鰻の類は毒蛇と見ることが出来ましょう。陸上の人達は、生きた魚類と云えば、せいぜい水族館のガラス箱の中でしか見たことのない陸上の人達は、この比喩を余りに大袈裟だと思うかも知れません。併し、あの食べては毒にも薬にもならない様な、おとなしげな蝦が、海中ではどの様な形相を示すものか、又海蛇の親類筋の穴子が、藻から藻を伝つて、如何に不気味な曲線運動を行うものか、實際海中に入つてそれを見た人でなくては、想像出来るものではないのです。

若しも、恐怖に色づけされた時、美が一層深味を増すものとすれば、世に海底の景色程美しいものはないでしょう。少くとも、千代子は、この始めての経験によって、生れて以來嘗て味つたことのない、夢幻世界の美に接した様に感じたのです。闇の彼方から、何か巨大なもの氣勢がして、二つの燐光が薄れると共に、徐々に電光の中に姿を現した、縞目鮮かな旗立鯛の雄姿に接した時などは、彼女は思わず感嘆の声を放つて、恐怖と歓喜の余り、青ざめて夫の袖にすがりついた程でした。

青白く光った、豊満な菱形の体軀たいくに、旭日旗きよくじつきの線条の様に、太く横ぎまに、二刷子ふたはけ、鮮かな黒褐色の縞目、それが電燈に映つて、殆ど金色に輝いているのです。妖婦の様に隈取つた、大きな目、突き出た脣、そして、背鰭せひれの一本が、戦国時代の武將の甲かぶとの飾り物に似て、目覚ましく伸びているのです。それが大きく身体からだをうねらせて、ガラス板に近づき、向きを換えて、ガラス板に沿つて、それとすれずれに、彼女の目の前に泳ぎ始めた時、彼女は再び感嘆の叫びを上げないではいられませんでした。それがカンヴァスの上の、画家の創作になる図案ではなくて、一匹の生物であることが、彼女にとつて驚異だったのです。場所が場所であり、不気味な海草と蒼黒く淀んだ水を背景にして、おぼろなる電燈の光によつてそれを眺めたのです。彼女の驚きは、決して誇張ではないのでした。

併し、進むに従つて、彼女は最早や、一匹の魚に驚いている余裕はありませんでした。次から次と、ガラス板の外そとに、彼女を送迎する魚類の夥しき、その鮮かき、気味悪さ、そして又美しき、雀鯛すずめだい、菱鯛ひし、天狗鯛てんぐ、鷹羽鯛たかのひ、あるものは、紫金しこんに光る縞目、あるものは絵の具で染め出した様な斑紋はんもん、若しその様な形容が許されるものならば、悪夢の美しき、それは実に、あの戦慄すべき悪夢の美しさの外のものではないのでした。

「まだまだ、私がお前に見せたいものは、これから先にあるのだよ。私があらゆる忠言に

耳を藉かそうともせず、全財産を抛なげうち、一生を棒に振って始めた仕事なのだ。私の拵かえ上げた芸術品がどの様に立派なものだか、まだすっかり出来上ってはいないのだけれど、誰よりも先に、先ずお前に見て貰もらいたいのだ。そして、お前の批評が聞きたいのだ。多分お前には私の仕事の値打が分って貰もらえると思うのだが。……ホラ、一寸ここを覗いてごらん、こうして見ると海の中が又違ちがって見えるのだよ」

廣介は、ある熱情をこめて囁くのでした。

彼の指さした箇所を見ますと、そこは、ガラス板の下部が径三寸ばかりというもの、妙な風にふくれ上った丁度別のガラスをはめ込んだ様な形なのです。勧められるままに千代子は背をかがめて、怖こわ怖こわそこへ目を当てました、最初は眼界全体にむら雲の様なものが拡ひろまって、何が何だか分かりませんでした、目の距離を色々に換かえている内に、やがて、その向側に、恐おそしい物の蠢うごいているのが、ハッキリと分って来るのでした。

十六

そこには、一抱えもあり相な岩石がゴロゴロ転がっている地面から、丁度飛行船の瓦斯ガス

囊のうを縦にした程の、褐色ふくろの囊のうが、幾つも幾つも、空そらぎまに浮き上って、それが水の為にユ
ラリユラリと揺ゆらいでいるのです。余りの不思議さにやや暫しばらく覗のぞいてみますと、大おお囊ぶくろの
後方の水が異様に騒さわぐかと思まう間に、囊の間をかき分ける様にして、絵に見る太古の飛竜
など云う生物いきものに似た、恐しく、巨大な獣がノソリノソリと這い出して来るのです。ハッ
として、何か磁石に吸い寄せられた感じで、身を引く力もなく、と同時に事の次第が少し
ずつ分りかけて来た為に、いくらか安んずる所もあつて、彼女はそのまま身動きもしない
で、不思議なものを見続けていたのですが、すると、正面を向いた顔の大きさが、飛行船
の气囊きのうの数倍もある怪物は、その顔全体が横に真二つに裂けた程の偉大な口をパクパクさ
せながら、飛竜そのままに、背中にならず高くもり上った数ヶの突起物をユラユラ動かし、
節くれ立った短い足で、ジリジリとこちらへ近づいて来るのです。そして、それが彼女の
目の前に接近した時の恐しさ、正面から見れば、殆ど顔ばかりの獣です。短い足の上にな
ぐ口が開き、象の様な細い目が直ちに背中の突起物に接しています。皮膚は、非常にでこ
ぼこの多い、ざらざらしたもので、その上に醜い斑点が黒く浮き出している、それが恐ら
く小山の様な大ききで、まざまざと彼女の目に映つたのです。

「あなた、あなた、……」

きな魚さかなの様なものが、無数の細い泡こまかの尾を引きながら、闇の水中を潜くぐって、恐しい速度で、その異様に滑かな白い身体が、電燈の光にチラと照されたかと思うと、餌物えもの欲しげに触手を動かしている、海藻の茂みの中へ姿を没して了ったのです。

「あなた……」

彼女は又しても、夫の腕にすがりつかないではいられませんでした。

「見ててごらん、あの藻もの所を見ててごらん」

廣介は彼女を上げます様に囁きました。

焰もっせの毛氈せんかと思えるあまのりの床が、一箇所異様に乱れて、真珠の様に艶つややかな水泡みなわが、無数に立昇り、ひとみを凝こらせば、その水泡の立昇るあたりには、青白く滑かな一物が、比目魚ひらめの恰好で海底に吸いついているのです。

やがて、昆布と見まがう黒髪が、もやの様に、のろろと揺いで、乱れて、その下から、白い額が、二つの笑った目が、そして、齒をむき出した赤い脣が、次々と現れ、腹はらば這はって顔丈おもてけを正面に向けたそのままの姿で、彼女は徐々にガラス板の方へ近づいて来るのでした。

「驚くことはない。あれは私の雇もくっている潜りの上手な女なのだ。私達を迎えに来て呉れ

たのだよ」

よろよろと倒れ相になった千代子を抱き止めて、廣介が説明します。千代子は息をはずませて、子供の様に叫ぶのです。

「まあ、びっくりしましたわ。こんな海の底に人間がいるんですもの」

海底の裸女は、ガラス板の所まで来ると、浮ぶ様に、フワリと立上りました。頭上に渦巻く黒髪、苦し相に歪んだ笑い顔、浮上った乳房、身体一面に輝く水泡、その姿で、彼女は内側の二人と並んで、ガラス壁に手をささえながら、そろそろと歩き始めるのでした。

二人はガラスを隔てて、人魚の導くがままに進むのです。海底の細道は、進むに従って屈折し、しかもその所々に、故意か偶然か、不思議なガラスの歪みが出来ていて、その箇所を通過する毎に、裸女の身体が真二つに引裂かれ、或は胴を離れて首丈けが宙を飛び、或は顔丈けが異常に大きく拡大され、地獄か極楽か、何れにしる此の世の外の不可思議な、悪夢の様に、次から次へと展開されるのであります。

併し、間もなく人魚は水中に耐え難くなつて、肺臓に溜めていた空気をホツと吐き出し、そのすさまじい泡の一団が、遙かの空に消える頃、彼女は最後の笑顔を残して、手足を鰭の様に動かすとヒラヒラと昇天し始めました。そして、腕白小僧がじだんだを踏む恰好で、

二本の足が中^{ちゆう}有^{ゆう}にもがき、やがて、白い足の裏丈^{うら}けが、頭上遙^{よう}かに揺曳^{ようえい}して、遂に裸女の姿は眼界を去つて了つたのです。

十七

この異様な海底旅行によつて、千代子の心は、人間界の常套を逃れ、いつしか果^{はて}知らぬ無幻の境をさまよい始めていました。T市のことも、そこにある菰田家の邸のことも、彼女の里方の人達のこと、皆遠い昔の夢の様で、親子も夫婦も主従も、その様な人間界の關係などは、霞^{かすみ}の様に意識の外にぼやけて了つて、そこには、魂に喰い入る人外境の蠱^こ惑^{わく}と、それが真実の夫であるまいが、ただ目の前にいる一人の異性に対する、身も心も痺^{しび}れる様な思慕の情のみが、闇夜^{あんや}の空の花火の鮮かさで、彼女の心を占めていたのです。

「さあ、これから少し暗い道を通るのだよ。危いから手を引いて上げよう」

やがて、ガラスの道の途切れる箇所^{箇所}に達すると、廣介は優しく云つて千代子の方を振りむきました。

「エエ」

と答えて、千代子は彼の手にすがるのです。

そして、道は突然暗くなつて、岩石をくり抜いた洞ほらあな穴の様な所へ折れ曲つて行きます。人一人やつと通れる程の、狭い道です。最早や陸上に出たのか、やつぱり海の底の岩窟がんくつなのか、千代子には一切様子が分らず、怖いと思えば此上もなく怖いのですけれど、その様なことよりは、指先を、血が通う程も握り合つた、男の腕の力が嬉しくて、ただもうそれで心が一杯になつて、暗闇の恐怖などに心を向ける余裕もないのでありました。

その闇の中を、さぐりさぐり、千代子の気持では十町も歩いたかと思ふ頃、その実数すうけ間の距離しかなかつたのですが、パツと眼界が開け、そこには、彼女が思わず驚きの叫声を立てた程、世にも雄大な景色が拡がっていたのです。

視力の届く限り、殆ど一直線に、物凄**い**ばかりの大谿けいこく谷が横わり、兩岸は空を打つかと見える絶壁が、眉を圧して打続き、その間に微動もしない深碧しんぺきの水が、約半町程の幅で、眼も遙かに湛たえられているのです。それは一見天然の大谿谷の様に見えますけれど、仔細に観察すれば、徐々に、その凡てが人工になつたものであることが分つて来ます。といつて、そこにはいささかも、醜**い**斧鉞ふえつの跡などが残っている訳ではありません。そうい

う意味ではなくて、これを天然の風景と見る時は、余りに整い過ぎ、夾雑物^{きようざつぶつ}がなさ過ぎるからなのです。水には一片の塵芥^{じんがい}も浮ばず、断崖には一茎^{ひとくき}の雑草すら生立^{おいた}つてはいないで、岩はまるで煉羊羹^{ねりようかん}を切った様に滑かな闇色に打続き、その暗さが水に映じて、水も又漆^{うるし}の様に黒いのです。従つて、先程眼界が開けたといったのも、決して普通の様に見えるくパツと開けたのではなくて、谷の奥行は霞む程も広く、絶壁は見上る様に高いのですけれど、それが一体に妖婦の眼隈^{くまどり}の様に艶かしくも黒ずんで、明るい所と云つては、絶壁と絶壁との庇間^{ひあわい}の細く区切られた空、それも平地で見る様な明るいものではなく、昼間も夕暮時の様に鼠色で、そこに星さえまたたいています。更らに、もつと變つているのは、この谿谷は、谷というよりは、寧ろ非常に深い、細長い池と唱^{とな}えた方がふさわしく、両方の端が行詰りになつていて、一方は、今二人が出て来た海底からの通路の所、他の一方は、その反対の側の遙かに霞んで見える、異様な階段に尽きているのです。その階段というのは、両側の断崖が徐々に狭^{せば}まって、その合^{がっ}した所に、水面から一直線に、雲に入るかとばかり、そそり立っている所の、これのみは真白に見えている、不思議な石階^{しだん}を云うのですが、それが周囲の黒^{くろ}ずくめの間に、見事な一線を劃^{かく}して、滝の様^{くだ}に下つている有様は、その単純な構図故に、一際崇^{すうこう}高の美を加えているのでありました。

千代子がこの雄大な景色に見とれて、廣介が何かの合図をしたらしく、ふと気がつくと、いつどこから現れたか、非常に大きな二羽の白鳥が、誇りがなうなじを上げ、その豊かな胸のあたりに、二筋三筋のゆるやかな波紋を作つて、しずしずと、二人の立つ岸辺をさして近づいて来るのでした。

「まあ、大きな白鳥だこと」

千代子が驚嘆の声を洩すのと殆ど同時でした。一羽の白鳥の喉のどの辺あたりから、美しい人間の女性の声が、響いて来る様に思われたのです。

「さあ、どうぞお乗り下さいませ」

すると、千代子の驚く暇もあらせず、廣介は彼女を抱いて、その前に浮んでいた白鳥の背にのせると、自分ももう一羽の白鳥へとまたがるのでした。

「ちつとも驚くことはないよ。千代子、これも皆私の家来なのだから。さあ白鳥、お前達は、私等二人を、あの向うの石段の所まで運ぶのだ」

白鳥は人語を口にする程ですから、この主人の命令をも理解したに相違なく、彼女達は胸を揃え、漆うるしの様な水面に、純白の影を流して、静かに遊およぎ始めるのです。千代子は余りの不思議さに、あつけに取られるばかりでしたが、やがて気がつくと、彼女の腿ももの下に蠢

くものは、決して水鳥の筋肉ではなくて、羽毛に覆われた人間の、肉体に相違ないことを確めることが出来ました。恐らくは一人の女が白鳥の衣ころもの中に腹這いはらんばになって、手と足で水を掻きながら泳いでいるのでありましょう。ムクムクと動く柔かな肩やお尻の肉の工合、着物を通して伝わる肌のぬく味、それらは凡て人間の、若い女性のものらしく感じられるのです。

併し、千代子はその上白鳥の正体を見極める暇いとまもなく、更らに奇怪な、若しくは艶麗なある光景に目をみはらねばなりませんでした。

白鳥が二三十間も進んだ時分、水底から彼女の傍そばに、ポツカリと浮上ったものがありました。浮上ったかと思うと、白鳥と並んで泳ぎながら、肩から上を彼女の方にねじ向けて、ニツコリ笑ったその顔は、まぎれもない、先刻さつき海底で彼女を驚かせた、あの人魚の女に相違ないのです。

「まあ、あなたはさつきの方ですわね」

併し、声をかけても、人魚はつつましやかに笑うばかりで、少しも言葉を返そうとはせず、ただやさしく会えしやく釈しながら、静に泳いでいるのです。そして、驚いたことには、人魚は決して彼女一人に止とどまらず、いつの間にか、一人二人と、同じ様な若い裸女達の数が

ふえ、見る見る一団の人魚群を為して、或は潜り、或は跳ね上り、或は戯れ合い、二羽の白鳥に雁行がんこうするかと見れば、抜手を切つて泳ぎ越し、遙か彼方に浮上つて、手まねきをして見せたり、闇色の絶壁と、漆の様な水を背景とし、そこに一糸を纏まとわぬ艶かしき影を躍らせて嬉戯きぎする様は、ギリシヤの昔語むかしがたりを画題とした名画でも見る様です。

やがて白鳥が道の半ば程まで来た時、水中の人魚に呼応する様に、遙か絶壁の頂上に、青空を区切つて、数人の同じ様な裸女の姿が現れました。そして、彼女等は如何なる水泳の達人達でありましょう、次々と幾丈の水面を目がけて、そこを飛び下るのです。ある者はさかさに髪をふり乱して、ある者は膝を抱えてギリギリ舞いながら、ある者は両手を伸し弓の様に背をそらせたまま、様々の姿態を以て、風に散る花瓣かべんの風情で、黒い岩壁を舞い下り、水煙を立てて水中深く沈むのです。

そして、夥多あまたの肉団に取囲まれたまま、二羽の白鳥は静に目ざす石階いしだんの下へと着きました。近づいて見れば、幾百段とも知れぬ、純白の石階は、空を圧して聳そびち、見上げた丈けでも、身内みのうちがむず痒くなるばかりです。

「あたし、^{とて}逆もここは昇れませんか」

千代子は、白鳥の背から陸上に降り立つと、先ず恐れを為して、云うのでした。

「なあに、思う程ではないのだよ。私が手を引いて上げるから、昇ってごらん、決して危くはないのだから」

「でも……」

千代子がためらう間に、廣介は構わず彼女の手を取って石段を昇り始めていました。そして、あれあれと云う間に、もう二十段ばかりも昇って了ったのです。

「そらね、ちつとも怖くはないだろう。さあもう一息だ」

そして、二人は一段一段と昇って行つたのですが、不思議なことには、間もなく頂上まで昇り切つて了うと、下で見た時には幾百段とも知れず、空まで届き相であつたのが、実際は百段もあるかなしで、決してそれ程高いものではないのです。それがどうしてあんなに見えたのか、臆病故^{ゆえ}の錯覚としても、余りにその差^{はなはだ}が甚しく、千代子は不思議に堪^たえられませんでした。後に至つて分つたことですが、先刻^{さつき}海底で鮫^{あんこう}鰻を太古の怪物と見誤つた様な、丁度あれに似た幻覚が、この島全体に満ち充ちている様な気がして、それ故に一

層その景色が美しいのだとも思われるのです。そして、今の階段の高さの相違などもその一つに算かぞえることが出来ました。彼女は、併し、それがどの様な理由によるものか、廣介から詳しい説明を聞くまでは少しも分らなかつたのです。

それは兎も角、彼等は今、階段を昇り切つた高地に立つて、彼等の行手を眺めました。

そこには狭い芝生の傾斜があつて、それを下ると道は直ちに鬱うっ蒼そうたる大森林に入つて
います。振向けば、巨大なる舟型を為した谿谷が、真黒な口を開き、その憂鬱な断崖の底
には、今彼等を運んで呉れた二羽の白鳥が、真白な紙かみくず屑の様に浮んでいるのが、心細く

眺められます。そして、行手は又しても、陰湿なる暗闇の森です。その二つの特異な風景
の間を区切る、この僅かの芝生は、晩春の午後の日ざしを一杯に受けて、赤々と燃え立ち、
陽炎かげろうにゆらぐ芝草の上を、白い蝶が低く飛びこうています。千代子はその奇異なる対象
に、ある不自然の美しさという様なものを感じないではいられませんでした。

見渡す限り果知らぬ老ろう杉さんの大森林は、むら雲のモクモクと湧上る形で、枝に枝を交え、
葉に葉を重ね、日向ひなたは黄こう色しよくに輝き、蔭は深海の水の様にドス黒く淀んで、それが不思議
なだんだら模様を現わしています。そして、この森の物凄さは、芝生に立つてじつとそ
の全形を見渡している間に、徐々に見る者の心に湧上つて来る、ある異様な、感情であり

ました。その様な感情を起させるものは、空を覆つてのしかかつて来る様な、森の雄大さにもありましよう。或は又萌え立つ若葉から発散する、あの圧倒的な獣物の香氣にもありましよう。併しその外ほかに、注意深い観察者は、森全体に加えられた悪魔の作為ともいふべきものを、遂には悟るに相違ありません。それは、この大森林の全形が、世にも異様なある妖魔の姿を現していることです。非常に神経質に作為の跡を隠してある為に、それは極くおぼろげにしか見別みわけることは出来ませんけれど、おぼろげなればおぼろげな程、却つてその恐怖は深みと大きさを増している様に見えるのです。恐らくこの森は自然のままの森ではなくて、極度に大仕掛けな人工が加えられたものでもありましようか。

千代子はこれらの風景を見るに従つて、彼女の夫の源三郎の心の底にこの様な恐しい趣味が隠されていたとは、どうしても考えられず、今彼女と並んで何気なく佇たたずんでいる、夫に似た一人の男を疑う心は、益々深まって来るのでありました。併し、彼女の異様な心理を何と解すべきでありましよう。彼女は刻一刻深まって行く恐しい疑惑と同時に、それと並行して、一方ではそのえたいの知れぬ人物に対する思慕の情も又、益々耐こらえ難きものに思われて来るのでありました。

「千代、何をぼんやりしているのだ。お前、又、この森を怖がっているのではないのかい。

みんな私の持えたものなんだよ。ちつとも怖がることなんかありやしない。さあ、あすこの木の下に、私達の従順な召使が待兼ねている」

廣介の声にふと見ると、森の入口の一本の杉の木の根許に、誰が乗り捨てたのか、毛けなみ並つや艶やかな二匹の驢馬ろばがつかがれて、しきりに草を噛んでいます。

「私達はこの森へ這入らねばなりませんの」

「才才、そうだとも。何も心配することはない。この驢馬が安全に私達を案内して呉れるのだよ」

そして、二人はおもちやの様な驢馬の背せなまたがに跨またがつて、奥底の知れぬ、闇の森へと進み入るのでありました。

森の中では、幾層にも木の葉が重り合つて、空を見ることは出来ませんけれど、でも、全く闇というではなく、黄昏たそがれとき時のほのかなる微光が、もやの様に立籠たちこめて、行手が見えぬ程ではありません。巨木の幹は大伽藍だいからんの円柱の様に立並び、その柱頭から柱頭を渡つて、青葉のアーチが連りつらな、足の下には、絨毯じゅうたんの代りに杉の落葉が分厚に散り敷いて居ります。森の中のたたずまいは、丁度名ある大寺院の礼拝堂らいはいに似て、その幾層倍も、神秘ひみつに、幽玄ゆうげんに、物凄く感じられるのです。

それにしても、この森の下道の調和と均整は、到底天然の企て及ぶ所ではありません。例えば、広漠たる大森林が、凡て杉の巨木のみで出来ていて、その外には一本の雑木も、一茎の雑草も見当らぬ点、樹木の間隔配置に人知れぬ注意が行届いて、異様の美を醸し出している点、その下を通ずる細道の曲線が、世にも不思議なうねりを見せて、通る者の心に一種異様の感情を抱かせる点などは、明かに自然をしのぐ作者の創意を語っています。恐らくは、彼の木の葉のアーチの快い均整にも、落葉の床の踏み心地にも、凡て注意深い人工が加味されているのではないのでしょうか。

主人を乗せた二匹の驢馬は、落葉の深さに少しの跽音も立てないで、静かに木の下の闇をたどります。獣も鳥も鳴かず、死の様な幽寂が森全体を占めています。が、やがて、奥深く進むにつれて、その静けさを一層引立てる為でもある様に、見えぬ頭上の梢のあたりから、梢に当たる風の音ともまがう程の鈍い音響が、例えばパイプオルガンの響きに似た、奇異な音楽が、幽玄の曲調を以て、おどろおどろと聞え始めます。

二人の卑小なる人間は、驢馬の背の上で、頭を垂れて一語をも語りません。千代子はふと顔を上げて口を動かし相にしましたが、そのまま言葉を発しないでうなだれました。無心の驢馬は黙々として進みます。

又暫く行くと、森の様子が少しづつ變つて来ることに気づきます。今まで一様にほの暗かった森の中に、どこからか銀色の光がさし始めたのです。落葉がチカチカと光り、見る限りの巨木の幹が、半面丈けまぶしく照らし出されています。半ばは銀色に輝き、半ばは漆黒の大円柱が、目路の限り打続く光景は、いとも見事なものでありました。

「もう森がおしまいなのでしょうか」

千代子は夢から醒めた様に、かすれた声で尋ねました。

「いやいや、あの向うに沼があるのだ。私達は今にそこへ出る筈なのだよ」

そして、彼等はやがて、その沼のほとりへたどりつきました。沼は絵にある狐火の形で一方の岸は丸く、反対の岸は焰の様な三つの深くびれになって、そこに水銀の様に重い水をたたえています。動かぬ水面には、大部分蒼黒い老杉の影を宿し、一部に少しばかりの青空を映しています。そこには最早や先程の音楽も響いては来ません。あらゆるものが沈黙し、あらゆるものが静止して、万象は深い眠りにおちているのです。

二人はその静寂を破るまいとする様に、静に驢馬を降り、無言のまま岸边に歩み寄りました。彼方の岸の突出した部分には、この森での唯一の例外として、数本の椿の老樹が、各々一丈ばかりもある濃緑の肌に、点々と血をにじませて夥多の花を開いています。

そして、驚くべきことは、その花の蔭の少しばかりのほの暗い空地に、一人の美しい娘が、乳色の肌をあらわにして、ものうげに横わっているのです。苔を褥しとねに頬杖ほおづえをついて、腹這いに沼を覗いているのです。

「まあ、あんな所に……」千代子は思わず声を揚げました。

「黙って」

廣介は、娘を驚かせまいとする様に、合図をして彼女の声を止めるのです。

娘は見る人のあるのを知ってか知らずにか、依然いぜんとして放心さまの様で沼の表を見入っています。森の中の沼、岸辺の椿、腹這いになった無心の裸女、この極めて単純な取合せが、如何にすばらしい効果を示していたでしょう。若しこれが偶然でなくて、意図された構図であるならば、廣介はいとも優れた画家と云わねばなりません。

二人は長い間岸に立つて、この夢の様な光景に見とれていたのですが、その長い間に少女は組み合せていた豊かな足を、一度組み直したばかりで、あきずまに、物憂ものうい凝視を続けているのでした。やがて、千代子が廣介にうながされて、驢馬に乗り、そこを立去ろうとした時に、少女の真上に咲いていた目立って大きな椿の花が一輪、液体がしたたる様に、ポトリと落ちて、少女のふくよかな肩先を滑り、沼の水に浮んだのです。でも、それが余

りに静であつたものですから、沼の水も気づかなかつたのか、一筋の波紋を描くでもなく、鏡の様な水面は依然として微動さえもしませんでした。

十九

そして又、二人は暫くの間、太古の森の下蔭を騎行きこうしたのですが、森の深さは行くに従つて極まる所を知らず、どう行けばここを出ることが出来るのか、再び最初の入口に帰るとしてもその道筋も分らぬ感じで、そうして無心の驢馬の歩むままに任せて居ることが、少なからず不安にさえ思われ始めるのであります。

ところが、この島の風景の不思議さは、行くと見えて帰り、昇ると見えて下り、地底が直ちに山頂であつたり、広野こうやが氣のつかぬ間に細道に変わつていたり、種々様々の魔法の様な設計が施されてあることで、この場合も、森が最も深くなり、旅人の心に云い知れぬ不安がきざし始める頃には、それが却つて、森もやがて尽きることを示しているのであります。

今までは適度の間隔を保つていた大樹共の幹が、氣のつかぬ程に、徐々にせばまって、

いつの間にか、それが幾層の壁を為して、隙間もなく密集している所に出ました。そこには最早や緑葉のアーチなどはなくて、生い茂るに任せた枝葉が、地上までも垂れ下り、闇は一層濃こまやかになって、殆ど咫尺しせきを弁じ難いのです。

「さあ、驢馬を捨てるのだ。そして私のあとについておいで」

廣介は、先ず自分が驢馬を下くだつて、千代子の手を執り、彼女を助けおろすと、いきなり前方の闇へと突き進むのでした。木の幹に身体をはさまれ、枝葉に行手をさえぎられ、道でない道を潜りながら、土竜もぐらの様に進むのです。そして、暫くもまれもまれている内に、ふと浮ぶ様に身が軽くなって、ハツと気がつくつと、そこは最早や森ではなく、うらうらと輝く陽光、見渡す限り目をさえぎる者もない緑の芝生、そして、不思議なことには、どこを見廻しても、あの森などは影も形も見えないのでした。

「まあ、あたしはどうかしたのでしょうか」

千代子は悩ましげにこめかみを圧えて、救いを求める様に廣介を見かえりました。

「いいえ、お前の頭のせいではないのだよ。この島の旅人は、いつでも、こんな風に一つの世界から別の世界へと踏み込むのだ。私はこの小さな島の中で幾つかの世界を作ろうと企てたのだよ。お前はパノラマというものを知っているだろうか。日本では私がまだ小学

生の時分に非常に流行した一つの見世物なのだ。見物は先ず細い真暗な通路を通らねばならない。そしてそれを出離れてパツと眼界が開けると、そこに一つの世界があるのだ。今まで見物達が生活していたのとは全く別な、一つの完全な世界が、目も遙かに打続いているのだ。何という驚くべき欺瞞ぎまんであつただろう。パノラマ館の外そとには、電車が走り、物売りの屋台が続き、商家の軒のきが並んでいる。そこを、昨日も今日も明日も、同じ様に、絶え間なく町の人々が行違つている。商家の軒のき続きには私自身の家も見えている。ところが一度パノラマ館の中へ這入ると、それらのものが悉く消え去つて了つて、広々とした満洲の平野が、遙か地平線の彼方までも打続いているではないか。そして、そこには見るも恐しい血みどろの戦たたかいが行われているのだ」

廣介は芝原の陽炎を乱して、歩きながら語り続けました。千代子は夢見心地に恋人のあとを追うのです。

「建物の外にも世界がある。建物の中にも世界がある。そして二つの世界が夫々それぞれ異つた土と空と地平線とを持つているのだ。パノラマ館の外には確かに日頃見慣れた市街があつた。それがパノラマ館の中では、どの方角を見渡しても影さえなく、満洲の平野が遙か地平線の彼方まで打続いているのだ。つまり、そこには同一地上に平野と市街との二重の世

界が在る。少くともそんな錯覚を起させる。その方法というのはお前も知っている通り、景色を描いた高い壁で以て見物席を丸く取囲み、その前に本当の土や樹木や人形を飾って、本物と絵との境をなるべく見分けられぬ様にし、天井を隠す為に見物席の廂ひさしを深くする。

ただそれだけのことなのだ。私はいつか、このパノラマを発明したというフランス人の話を聞いたことがあるけれど、それによると、少くとも最初発明した人の意図は、この方法によつて一つの新しい世界を創造することにあつたらしい。丁度小説家が紙の上に、俳優が舞台の上に、夫々一つの世界を作り出そうとする様に、彼も亦、彼独特の科学的な方法によつて、あの小さな建物の中に、広漠こうぼくたる別世界を創作しようと試みたものに相違ないのだ」

そして、廣介は手を挙げて、陽炎と草いきれのかなたに霞む、緑の広野と青空との境を指さしました。

「この広い芝原を見て、お前は何か奇異の感じに撃たれはしないだろうか。あの小さな沖の島の上にある平野としては、余りに広すぎるとは思わないだろうか。見るがいい。あの地平線の所までは、確かに数哩マイルの道りがある。本当を云えば、地平線の遙か手前に、海が見える筈ではないだろうか。しかも、この島の上には、今通つた森や、ここに見えてい

る平野の外ほかに、一つ一つが数哩りづつもある様な種々様々の風景が作られているのだ。それでは、沖の島の広さがM県全体程あった所で、まだ不足する筈ではないだろうか。お前には私の云っている意味が分るかしら。つまり私はこの島の上に幾つかの夫々独立したパノラマを作ったのだ。私達は今まで海の中や谷底や森林のほの暗い道ばかりを通過して来た。あれはパノラマ館の入口の暗道に相当するものかも知れないのだ。今私達は春の日光と陽炎と草いきれの中に立っている。これはその暗道を出た時の夢からさめた様なほがらかな気持ちにふさわしくはないだろうか。そして、これから私達は愈々私のパノラマ国へ這入って行くのだ。だが私の作ったパノラマは、普通のパノラマ館の様に壁に描いた絵ではない。自然を歪める丘陵の曲線と、注意深い光線の按あんばい排ばいと、草そうもく木岩石の配置とによって、巧みに人工の跡をかくして、思うがままに自然の距離を伸縮したのだ。一例を上げて見るならば、今通り抜けたあの大森林だ。あの森の真実の広さを云ったところで、お前は決して本当にしないだろう。それ程狭いのだ。あの道は、それと悟られぬ巧みな曲線を描いて、幾度も幾度もあと戻りをしているのだし、左右に見えていた果しも知れぬ杉の木立は、お前が信じた様に皆同じ様な大木ではなくて、遠くの方は僅か高さ一間程の、小さな杉の苗木の林であったかも知れないのだ。光線の按排によってそれを少しも分らぬ様にすること

はさして難しい仕事ではないのだよ。その前に私達が昇った白い石の階段にしてもその通りだ。下から見上げた時は雲のかけ橋の様に高く見えて、その実は百段余りしかない。お前は多分気づかなんだであろうが、あの石段は芝居の書割りの様に上部程狭くなっている上に、階段の一つ一つも、気づかれぬ程度で、上に行く程高さや奥行きが短く出来ているのだ。それに両側の岩壁の傾斜に工夫が加えられている為に、下からはあの様に高く見える訳なのだ」

併し、その様な種明しめいた説明を聞いても、幻影の力が余りに強くて、千代子の心に記された不可思議な印象は少しも薄らぎませんでした。そして、現に目の前に拡がっている、無際涯むさいがいの広野は、その果てはやっぱり地平線の彼方に消えているとしか考えられぬのでありました。

「では、この平野も実際はそんな風に狭いのでしょうか」彼女は半信半疑の表情で尋ねました。

「そうだとも、気づかれぬ程の傾斜で、周囲が高くなっていて、そのうしろの様々のものを隠しているのだ。だが、狭いと云っても直径五六町はあるのだよ。その普通の広っぱを一層効果を出す為に無際涯に見せたまでなのだ。でも、たったそれだけの心遣いが、何と

いうすばらしい夢を作り出して呉れたのだろう。お前には、今、説明を聞いたあとでも、この大平原がたった五六町の広つぱに過ぎないなどは、どうしても信じられないことだろう。作者の私でさえもが、今こうして陽炎の為に波の様にゆらぐ地平線を眺めていると、本当に果しも知らぬ広野の中へ置き去りにされた様な、云うに云われぬ心細さと、不思議に甘い哀愁とを感じないではいられぬのだ。見渡す限り何のさえぎる物もない、空と草だ。私達には今、それが全世界なのだ。この草原は謂わば沖の島全体を覆い、遠くI湾から太平洋へと拡がって、その涯はてはあの青空つらなに連っているのだ。西洋の名画なれば、ここに夥しい羊の群と牧童とが描かれていることだろう。或は又、あの地平線の近くを、ジプシイの一団が長蛇の列を作って、黙々と歩いて行く所も想像出来る、彼等は半面に夕日を受けて、その非常に長い影が芝原の上をしずしずと動いて行くことでもあろう。だが、見る限り、一人の人も、一匹の動物も、たった一本の枯れ木さえも見えない。緑の沙漠さばくの様なこの平野は、その様な名画よりも、一層私達を撃ちはしないだろうか。ある悠ゆうきゆう久なるものが恐しい力を以て私達に迫っては来ないだろうか――

千代子は先程から、青いというよりは寧ろ灰色に見える、余りに広い空を眺めていました。そして、いつとはなくまぶたに溢あふれた涙を隠そうともしませんでした。

「この芝原から道が二つに分れているのだ。一つは島の中心の方へ、一つはその周囲をとり巻いて並んでいる幾つかの景色の方へ。本当の道順は先ず島の周囲を一順して、最後に中心へ這入るのだけれど、今日は時間もないのだし、それらの景色はまだ完全に出て上っている訳でもないのだから、私達はここからすぐに中心の花園の方へ出ることしよう。

そこが一番お前の気にも入ることだろう。だが、この平野からすぐに花園と続いては、余りにあつけない気がするかも知れない。私は外の幾つかの景色についても、その概略をお前に話して置いた方がいい様な気がするのだ。花園への道まではまだ二三町もあることだから、この芝生を歩きながら、それらの不思議な景色のことをお前に伝えることにしよう。

お前は造園術で云うトピアリーというものを知っているだろうか。つげやサイプレスなどの常緑木を、或は幾何学的な形に、或は動物だとか天体などになぞらえて、彫刻の様に刈込むことを云うのだ。一つの景色には、そうした様々の美しいトピアリーが涯しもなく並んでいる。そこには雄大なもの、繊細なもの、あらゆる直線と曲線との交錯が、不思議なオーケストラを奏でていているのだ。そして、その間々々には、古来の有名な彫刻が、恐しい群を為して密集している。しかも、それが悉く本当の人間なのだ。化石した様に押し黙っている裸体の男女の一大群集なのだ。パノラマ島の旅人は、この広漠たる原野から突

然そこへ這入つて、見渡す限り打続く人間と植物との不自然なる彫刻群に接し、むせ返る様な生命力の圧迫を感じるだろう。そして、そこに名状の出来ない怪奇な美しさを見出すのだ。

又一つの世界には生命のない鉄製の機械ばかりが密集している。絶えまもなくビンビンと廻転する黒怪物の群なのだ。その原動力は島の地下で起している電気によるのだけれど、そこに並んでいるものは、蒸気機関だとか、電動機だとか、そういうありふれたものではなくて、ある種の夢に現れて来る様な、不可思議なる機械力の象徴なのだ。用途を無視し、大小を転倒した鉄製機械の羅列なのだ。小山の様なシリンダア、猛獣の様にうなる大飛輪、真黒な牙と牙とをかみ合せる大歯車の争闘、怪物の腕に似たオツシレーティング・レヴァー、気違い踊りの、スピード・ヴァーナー、縦横無尽に交錯するシャフト・ロッド、滝の様なベルトの流れ、或はベベルギア、オーム・エンド・オームホイール、ベルトプーレイ、チェーンベルト、チェーンホイール、それが凡て真黒な肌にあぶらあせ 膩汗をにじませて、気違いの様に盲目滅法に廻転しているのだ。お前は博覧会の機械館を見たことがあるだろう。あすこには技師や説明者や番人などがいるし、範囲も一つの建物の中に限られ、機械は凡て用途を定めて作られた正しいものばかりだが、私の機械国は、広大な、無際涯に見

える一つの世界が、無意味な機械を以て隈なく覆われているのだ。そして、そこは機械の王国なのだから外の人間や動植物などは影も形も見えないのだ。地平線を覆って、独りで動いている大機械の平原、そこへ這入った小さな人間が何を感じるかは、お前にも想像が出来るであろう。

其^{そのほか}外、美しい建築物を以て充された大市街や、猛獣毒蛇毒草の園や、噴泉や滝や流れや様々の水の遊戯を羅列した、しぶきと水煙の世界なども已に設計は出来ている。いつとはなく、それらの一つ一つの世界を夜毎の夢の様に見尽して、旅人は、最後に渦巻くオーロラと、むせ返る香気と、^{ばんかきよう}万花鏡の花園と、華麗な鳥類と、嬉戯する人間との夢幻の世界に這入るのだ。だが、私のパノラマ島の眼目は、ここからは見えぬけれど、島の中央に今建築している、大円柱の頂上の花園から、島全体を見はらした美観にあるのだ。そこでは島全体が一つのパノラマなのだ。別々のパノラマが集って又一つの全く別なパノラマが出来ているのだ。この小さな島の上に幾つかの宇宙がお互に重なり合い、食違つて存在しているのだ。だが、私達はもうこの平野の出口へ来て了つた。さあ手をお貸し、私達は又暫く狭い道を通らなければならないのだ」

広原のある箇所に、間近く寄つて見ないでは分らぬ様な、一つのくびれがあつて、忍び

の道はそこに薄暗く生い茂った雑草をかき分けて進む様になっています。その中において暫く行くと、雑草は益々深くなつて、いつしか二人の全身を覆つて了い、道は又、あやめもわかぬ暗闇へと這入つて行くのであります。

二十

そこにはどの様な不思議な仕掛けがしてあつたのか、それとも又、ただ千代子の幻覚に過ぎなかつたのか、一つの景色から、僅かばかりの暗闇を通つて、今一つの景色へと現れるのが、何かこう夢の様で、一つの夢から又別の夢へと移る時の、あの曖昧な、風に乗っている様な、その間あいだ全く意識を失っている様な、一種異様な心持なのでした。随つて、その一つ一つの景色は、全く平面を異にした、例えば三次の世界から四次の世界へと飛躍でもした感じで、ハツと思つ間に、今まで見ていた同一地上が、形から色彩においから匂においに至るまで、まるで違つたものになつていたのでした。それは本当に夢の感じか、そうでなければ、活動写真の二重焼付けの感じです。

そして、今二人の目の前に現れた世界は、廣介はそれを花園と称していたのですけれど、

一般に花園という文字から聯想される何物でもなくて、乳色に澱んだ空と、その下に不思議な大波の様に起伏する丘陵の肌が、一面に春の百花によって、爛れているに過ぎないのです。併し、その余りの大規模と、空の色から、丘陵の曲線と百花の乱雑に至るまで、悉く自然を無視した、名状の出来ない人工の為に、その世界に足を踏み入れたものは、暫く茫然として佇む外はないのでした。

一見単調に見えるこの景色の内には、何かしら、人間界を離れて、例えば悪魔の世界に入つた様な、異様な感じを含んでいました。

「お前、どうかしたのか。目まいがするのか」

廣介は驚いて、倒れかかる千代子の身体を支えました。

「エエ、何ですか頭が痛くって……」

むせる様な香気が、例えば汗ばんだ人間の肉体から発散する異臭に似て、併し決して不快ではない所の香気が、先ず彼女の頭の芯をしびれさせたのです。それに、不思議な花の山々の、無数の曲線の交錯が、まるで小舟の上から渦巻き返す荒浪を見る様に、恐しい勢で彼女を目がけておし寄せると疑われたのです。決して動きはしないのです。でもその動かぬ丘陵の重なりには、考案者の不気味な奸計が隠されていたとしか考えられません。

「私、何だか恐しいのです」

漸く立直った千代子は、目をふさぐ様にして、僅かに口を利きました。

「何がそんなに恐しいの」

廣介は唇の隅に、ほのかな笑いを震わせて聞きました。

「何だか分かりませんわ。こんなに花に包まれていて、私は無^{むし}上^{しょう}に淋しい気がいたします。来てはならない所へ来た様な、見てはならないものを見ている様な気持なのですわ」

「それはきつと、この景色が余り美しいからだよ」廣介はさり気なく答えました。「それよりも、御覽。あすこへ、私達の迎いのものがやって来たから」

とある花の山蔭から、まるで御祭の行列の様に、しずしずと一組の女達が現われました。多分身体全体を化粧しているのでしょう、青味がかった白さに、肉体の凹^{おう}凸^{とつ}に^{おうとつ}応じて、紫色の隈を置いた、それ故に一層陰影の多く見える裸体が、背景の真赤な花の屏^び風^{ふう}の前に、次々と浮出して来るのです。

彼女等は、テラテラと膩^{あぶら}ぎったたくましい足を、踊る様に動かし、黒髪を肩に波うたせ、真赤な唇を半月形に開いて、二人の前に近寄り、無言のまま、不思議な円陣を作るのでした。

「千代子、これが私達の乗物なのだ」

廣介は千代子の手を取って、数人の裸女によって作られた蓮台れんたいの上におし上げ、自分もそのあとから、千代子と並んで、肉の腰掛に座を占めました。

人肉の花びらは、開いたまま、その中央に廣介と千代子とを包んで、花の山々を巡り始めるのです。

千代子は、目の前の世界の不思議さと、裸女達の余りの無感動に幻惑して、いつしかこの世の羞恥しゆうちを忘れて了った形でした。彼女は、膝の下に起伏する、肥え太った腹部やわらの柔味みを、寧ろ快くさえ感じていました。

丘陵と丘陵との間の、谷間とも見るべき部分に、細い道は幾曲りしながら続きました。その裸女達の素足が踏みしだく所にも、丘と同じ様に百花が乱れ咲いているのです。肉体の柔かなバネ仕掛けの上に、深々としたこの花の絨毯は、彼等の乗物を、一層滑かに心地よくしました。

併し、この世界の美は、絶えず彼等の鼻をうつつている、不思議な薫かおりよりも、乳色に澱んでいる異様な空の色よりも、いつから始まったともなく、春の微風そよかぜの様に、彼等の耳を樂しませている、奇妙な音楽よりも、或は又、千紫万紅せんしばんこう、色とりどりの花の壁よりも、

その花に包まれた山々の、語り得ぬ不思議な曲線にありました。人はこの世界に於て、始めて、曲線の現し得る美を悟つたでありましょう。自然の山岳と、草木と、平野と、人体の曲線に慣れた人間の目は、ここにそれらとはまるで違つた曲線の交錯を見るのです。どの様な美女の腰部ようぶの曲線も、或ほどの様な彫刻家の創作も、この世界の曲線美には比べることが出来ません。それは自然を描き出した造物主ではなくて、それを打ち亡ぼそうと企らむ悪魔だけが描き得る線であつたかも知れません。ある人はそれらの曲線の重なりから、異常なる性的圧迫を感じずでありましょう。併しそれは決して現実的な感情を伴うものではないのです。我々は悪夢の中うちのみ、往々にしてこの種の曲線に恋することがあります。廣介は、その夢の世界を、現実の土と花とを以て、描き出そうと試みたものに相違ありません。それは崇高というよりも、寧ろ汚穢おわいで、調和的というよりも、寧ろ乱雑で、その一つ一つの曲線と、そこに濃み爛れた百花の配置は、快感よりは一層限りなき、不快を与えさせします。それでいて、その曲線達に加えられた不可思議なる人工的交錯は、醜しゆうを絶して、不協和音ばかりの、異様に美しい大管絃楽を奏しているものでありました。

又、この風景作家の異常なる注意は、裸女の蓮台が通り過ぎる所の、谿間たにまの花の細道が作る曲線にまでも行届いていたのです。そこには曲線そのものの美ではなくて、曲線に沿

つて運動するものの感ずる、謂わば肉体的快感が計画されていました。或は緩かに、或は急角度に、或は上り^{のぼ}、或は下り、道は上下左右に様々の美しい曲線を描きました。それは例えば、空中に於て飛行家が味わう様な、又、我々がつづら折の峠道を走る自動車の中で感ずる様な、曲線運動の快感の、もつと緩かに且つ^か美化されたものと云えばいいでしょうか。

時々上り坂はありながら、道は少しずつある中心点に向つて下つて行く様に見えました。そして、異様な香気と、地の底からの様に響く音楽とは、層一層その度を高め、遂には、彼等の鼻をも耳をも、その美しさに無感覺にしてう程も、絶え間なく続いたのでした。

時とすると、谿間は広々とした花園と開け、その彼方に、空へのかけ橋の様に、花の山がそびえ、その茫漠たる斜面に、吉野山の花の雲を数倍した、幻怪なる光景を展開しました。そして、一層驚くべきは、その斜面と広野との、虹の様な花を分けて、点々と、幾十人の裸体の男女の群が、遠くのもののは白豆の様に小さく、嬉々としてアダムとイヴの鬼ごっこをやっていることでした。山を駈け降り、野を横切つて、黒髪を風になびかせた一人の女が、彼等から一間ばかりの所へ来て、バツタリ倒れました。すると、彼女を追つて来た一人のアダムは、彼女を抱き起して、彼の広い胸の前に、一文字^{いちもんじ}に抱えると、抱くも

のも、抱かれたものも、この世界に充満する音楽に合せて、高らかに歌いながら、しずしずと彼方へ立去るのでした。

又ある箇所には、細い谷間の道を覆って、アーチの様に、白鯰のユーカリ樹の巨木が腕をのべ、その枝もたわわに裸女の果実が実っていました。彼女等は、太い枝の上に身を横え、或は両手でぶら下って、風にそよぐ木の葉の様に、首や手足をゆすりながら、やつぱりこの世界の音楽を合唱しているのです。裸女の蓮台は、その果実の下を、凡そ無関心を以て、静に練って行くのです。

延長にして一里はたつぷりあつたと思われる、道々の花の景色、その間に千代子の味つた不思議な感情、作者はそれをただ、夢とのみ、或は瑰麗なる悪夢とのみ、形容するの外はありません。

そして、遂に彼等が運ばれたのは、巨大なる花の挿鉢の底でありました。

その景色の不思議さは、挿鉢の縁に当る、四周の山の頂から、滑かな花の斜面を伝つて、雪白の肉塊が、団子の様に珠数継ぎにころがり落ちて、その底にたたえられた浴槽の中へしづきを立てていることでした。そして、彼女等は、挿鉢の底の湯気の中を、バチャバチャと跳ね廻りながら、あののどかな歌を合唱するのです。

いつ着物を脱がされたのか、殆ど夢中の間に、千代子等も華やかな浴客達に混つて、快い湯の中につかっています。不自然な衣服を着けていることが、寧ろ恥かしくなるこの世界では、千代子も彼女自身の裸体を殆ど気にしないでいられたのです。そして、彼等を乗せた裸女達は、ここでこそ文字通り蓮台の役目を勤め、長々と寝そべって、首から下を湯につけた二人の主人を、彼女達の肉体によって支えなければなりませんでした。

それから、名状の出来ぬ一大混乱が始つたのです。肉塊の滝つ瀬は、益々その数を増し、道々の花は踏みにじられ、蹴散らされて、満目の花吹雪となり、その花びらと湯気としぶきとの濛々もうもうと入乱れた中に、裸女の肉塊は、肉と肉とを擦り合せて、桶の中の芋いもの様に混乱して、息も絶え絶えに合唱を続け、人津浪は、或は右へ或は左へと、打寄せ揉み返す、その真只まっただなか中に、あらゆる感覚を失つた二人の客が、死骸の様に漂っているのです。

二十一

そうして、いつの間にか夜が来たのです。乳色であつた空は、夕立雲の黒色こくしよくに変わり、百花の乱れ咲いた、なまめかしき丘々も、今は物凄い黒入道くろにゅうどうと聳えそび、あの騒がしい人

肉の津浪も、合唱も、引潮の様に消え去つて、夜目にもほの白く立昇る湯気の中には、廣介と千代子とただ二人が取残されていました。彼等の蓮台を勤めた女共も、ふと気がつく、もう影も形も見えないのです。その上、この世界を象徴するかに見えた、あの一種異様の妖艶な音楽も、余程以前から聞えないのです。底知れぬ暗闇と共に、黄泉よみじの静寂が、全世界を領していました。

「マア」

やつと人ひと心こころついた千代子は、幾度いくたびとなく繰返した感嘆詞を、もう一度繰返さないではいられませんでした。そして、ほつと息をつく、今まで忘れていた恐怖が、吐き気のように、彼女の胸にこみ上げて来たのです。

「サア、あなた、もう帰りましょうよ」

彼女は暖い湯の中で震えながら、夫の方をすかして見ました。水面から首丈けが、黒いブイの様に浮上つて、彼女の言葉を聞いても、それは動きもしなければ、何の返事をもしないのです。

「あなた、そこにいらつしやるのは、あなたですわね」

彼女は恐怖の叫声を上げて、黒い塊かたまりの方へ近より、その頸くびと覚しきあたりを捉とらえて、力

一杯ゆすぶるのでした。

「ウウ、帰ろう。だが、その前にもう一つ丈けお前に見せたいものがあるのだよ。まあその怖がらないで、じつとしていいがいい」

廣介は、何か考え考え、ゆつくりと答えました。その答え方が一層千代子を恐れさせたのです。

「私、今度こそ本当に、もう我慢が出来ませんわ。私は怖いのです。ごらんなさいな。こんなに身体が震えていますのよ。もうもうこんな恐しい島になんか、一時いっときだつて我慢が出来ませんわ」

「本当に震えているね。だが、お前は何がそんなに恐しいのだい」

「何がつて、この島にある不気味な仕掛けが恐しいのです。それをお考えなすつたあなたが恐しいのです」

「私がかい」

「ええ、そうですよ。でも、お怒りおこなすつては厭いやですわ。私にはこの世の中にあなたの外ほかには何にもないのです。それでいて、この頃は、どうかしたはずみで、ふとあなたが恐しくなるのです。あなたが本当に私を愛して下さるかが疑わしくなつて来るのです。こん

な不気味な島の、暗闇の中で、ひよつとして、あなたが、実はお前を愛していないのだなんて、おっしゃりはしないかと思うと、私はもう恐こわくて怖こわくて……」

「妙なことを云い出したね。お前はそれを今云わない方がいいのだよ。お前の心持は私にもよく分っているのだ。こんな暗闇の中でどうしたもんだ」

「だって、今丁度そんな気がし出したのですもの、多分私、あんな色々なものを見て、興奮してますのね。そして、いつもよりは思ったことが云える様な気持なのですわ。でも、あなたお怒りなさないでね。ね」

「お前が私を疑っていることは、よく知っているよ」

千代子は、この廣介の口調にハツとして、突然口をつぐみました。不思議なことには、彼女はいつであつたか、現実にか、或は夢の中でか、そっくりこの通りの情景を経験したことがある様に思われて来ました。それは何かしら、彼女がこの世に生れて来る以前の出来事らしくもあるのです。その時も、彼等は地獄の様な暗闇の中で、湯の上に首丈けを出して、小さな小さな二人の亡者の様に向き合っていました。そして、相手の男はやっぱり、「お前が私を疑っていることは、よく知っているよ」と答えたのです。その次に、彼女はどんなことを云つたか、男がどんな態度を示したか、或はどんな恐しい終局であつたか、

そうしたあとのことは、はつきり分っている様でいて、さてどうしても思出せないのです。

「私はよく知っているのだよ」

廣介は、千代子が黙もくしたのを、追駈ける様に繰返しました。

「いいえ、いいえ、いけません、もうおつしやらないで下さいまし」千代子は、廣介が続け相にするのを押し止めて叫びました。「私は、あなたとお話するのが怖いのです。それよりも、何もおつしやらないで、早く、早く私をつれ帰って下さいまし」

その時でした。暗闇を裂く様な、烈しい音響が耳をつんざいたかと思うと、いきなり夫の首に取りすがった千代子の頭上に、パリパリと火花が散って、化物の様な五色ごしきの光ひかりも物が拵のったのです。

「驚くことはない。火花だよ。私の工夫したパノラマ国の火花だよ。ソレごらん。普通の火花と違って、私達のは、あんなに長い間、まるで空に映した幻燈の様にじつとしているのだよ。これだよ、私がさつきお前に見せるものがあると云ったのは」

見れば、それは廣介の云う通り、丁度雲に映った幻燈の感じで、一匹の金色こんじきに光った大蜘蛛おおぐもが、空一杯に拵うごめっているのです。しかも、それが、はつきりと描かれた八本の足の節々を、異様に蠢うごめかせて、徐々に彼等の方へ落ちて来るのでした。仮令それが火を以て描

かれた絵とは云え、一匹の大蜘蛛が真暗な空を覆つて、最も不気味な腹部をあらわに見せて、もがき乍ら頭上に近づいて来る景色は、ある人にとつては、こよなき美しさであろうとも、生来蜘蛛嫌いの千代子には、息づまる程恐しく、見まいとしても、その恐しさに、やつぱり不思議な魅力があつてか、ともすれば彼女の目は空に向けられ、その都度都度、前よりは一層間近く迫る怪物を見なければならぬのでした。そして、その景色そのものよりも、もつともつと彼女を震い上らせたのは、この大蜘蛛の花火をも、彼女はいつかの経験の中で見ていた、あれも、これも、すっかり二度目だという意識でした。

「私はもう花火なんか見たくはありません。そんなにいつまでも私を怖がらせないで、本当に、帰らせて下さいまし。サア、帰りましょうよ」

彼女は齒の根をかみしめて、やつと云うのでした。併し、その時分には、火の蜘蛛は、もう跡方もなく闇の中へ溶込んでいたのです。

「お前は花火までが怖いのかい。困つた人だな。今度はあんな気味の悪いのではなくて綺麗な花が開く筈だ。もう少し辛抱して見るがいい。ソラ、この池の向側に黒い筒が立っていたのを覚えているだろう。あれが煙火の筒なんだよ。この池の下に私達の町があつて、そこから私の家来達が花火を揚げているのだよ。ちつとも、不思議なことも、怖いことも

ありやしない」

いつか廣介の両手が、鉄の締木しめぎの様に、異様な力を以て、千代子の肩を抱き締めていました。彼女は今は、猫の爪にかかった鼠の様に、逃げようとて逃げることも出来ないのです。

「アラ」それを感じると、彼女はもう悲鳴を揚げないではいられませんでした。「ご免なさい。ご免なさい」

「ご免なさいだつて、お前は何をあやまることあるんだい」廣介の口調は段々一種の力を加えて来ました。「お前の考えていることを云つてごらん。私をどんな風に思っているか、正直に云つてごらん。サア」

「ああ、とうとう、あなたはそれをおつしやいました。でも、私は今は怖くつて怖くつて」千代子の声は泣きじやくる様に、途切れ途切れでした。

「だが、今が一番いい機会なのだ。私達の側そばには誰もいない。お前が何を云おうと、お前が恐れている様に、世間には聞えないのだ。私とお前の間に、何のかくし立てがいるものか。サア、一思いに云つてごらん」

真暗な谷間の浴槽の中で、不思議な問答が始つたのです。その情景が異常であるだけ、

二人の心持には、多少狂気めいた分子が加わっていかなかったとは云えません。殊に千代子の声は、もう妙に上ずっていたのです。

「では申上げますが」千代子はふと人が変わった様に、雄弁に喋り始めました。「打開けて申しますと、私もあなたから聞きたくって聞き度くって仕様がなかつたのです。どうかそんなにじらさないで、本当のことをおっしゃって下さいまし。……あなたは若しや菰田源三郎とは、全く別な方ではなかつたのですか。サア、それを聞かせて下さいまし。あの墓場から生き返っていらしつてからというもの、長い間私は、あなたが本当のあなたかどうかを疑っていたのでございます。源三郎はあなたの様な恐しい才能を、まるで持つてはいませんでした。この島へ来ます以前から、私はもう、多分あなたも御氣附きになつていらつしやることで、半分はその疑いを確めて居りました。それに、この色々の気味の悪い、それでいて、不思議と人を惹きつける景色を見ますと、あとの半分の疑いも、はつきり解けて了つた様に思うのでございます。サア、それをおっしゃって下さいまし」

「ハハハハハハ、お前はとうとう本音を吐いたね」廣介の声音は、いやに落ちついていました。どこか自暴自棄の調子を隠すことは出来ませんでした。「私は飛んだ失敗をやつたのだ。私は愛してはならぬ人を愛したのだ。私はどんなにそれを堪え堪えしただろう。

だが、もう一寸という所で、とうとう辛抱が出来なかつた。そして、私の心配した通り、お前は私の正体を悟つて了つたのだ。……」

それから、廣介は、彼も亦憑つかれた者の雄弁を以て、彼の陰謀の大略を物語るのでした。その間にも、何も知らぬ地下の花火係は、主人達の目を喜ばせようと、用意の花火丸だまを、次から次へ打上げていました。或は奇怪なる動物共の、或は瑰か麗れいなる花形の、或は荒唐無稽な様々の形の、毒々しく青に赤に黄に、闇の天空にきらめき渡る火焰は、そのまま谷底の水面いそどを彩り、その中にポツカリ浮上つている、二つの西瓜すいかの様な彼等の頭を、その表情の微細な点に至るまで、舞台の着色照明そのままに、異様に映し出すのでした。

一心に喋り続ける廣介の顔が、或る時は酔っぱらいの赤あか面かづらとなり、或る時は死人の様に青ざめ、或る時は黄疽おうだんや病みの物凄い形相を示し、又ある時は真暗闇の中の声のみとなり、それが奇怪なる物語の内容と入れ混つて、極度に千代子を脅おびすのでした。千代子は余りの恐さに堪たえがたくなつて、幾度か、その場を逃げ出そうと試みたのですが、廣介の物狂ほうわしき抱よう擁ようはいつかな彼女を離すことではありませんでした。

「お前は、どの程度まで私の陰謀を察していたか知らない。敏感なお前は定めし可也かなり深い所まで想像を廻めぐらしてもいただろう。だが、流石のお前も、私の計画なり理想なりが、これ程根強いものとは、まさか知らなかっただろうね」

物語りを終ると、丁度その時は真赤な花火が、まだ消えやらず空を染めていましたが、その赤鬼の形相を以て、廣介はじつと千代子を睨みつけるのでした。

「帰して、帰して——」

千代子は、もうさい前から、外聞を忘れて、泣きわめきながら、ただこの一ことを繰返すばかりでした。

「聞け、千代子」廣介は彼女の口をふさぐ様にして、怒鳴りつけました。「こんなに打開けて了つてから、お前をただ帰すことが出来ると思つていいのか。お前はもう俺を愛さないのか。昨日まで、いやだった先程まで、お前は俺が本当の源三郎であるかどうかを疑いながら、やっぱり俺を愛していたではないか。それが、俺が正直に告白をしてしまうと、もう俺を仇敵かたきの様に憎み恐れるのか」

「離して下さい。帰して下さい」

「そうか、じゃあ、お前はやつぱり、俺を夫の讐かたきだと思ってるのだな。菰田家の仇あだと思ってるのだな。千代子、よく聞くがいい。俺はお前がこの上もなく可愛い。一層いっそうお前と一緒に死んで了い度い程に思ってるのだ。だが、俺にはまだ未練がある。人見廣介を殺し、菰田源三郎を蘇生させる為に、俺はどれ程の苦心をしたか。そしてこのパノラマ国を築くまでにどの様な犠牲を払ったか。それを思うと、今一月程で完成するこの島を見捨てて死ぬ気にはなれない。だから、千代子、俺はお前を殺す外ほかに方法はないのだ」

「殺さないで下さい」それを聞くと千代子のかれた声をふり絞って叫ぶのです。「殺さないで下さい。何でもあなたのおっしゃる通りにします。源三郎として今までの様にあなたにつかえます。誰にも云いません。これから先も口へは出しません。どうか殺さないで下さい」

「それは本気か」煙火はなびの為に真青に彩られた廣介の顔の、目ばかりが紫色にギラギラと輝いて、突き通す様に千代子を睨みつけました。「ハハハハハハハ、駄目だ、駄目だ。俺はもう、お前が何と云おうが、信ずることは出来ないのだ。ひよつとしたら、お前はまた幾らかは俺を愛してくるかも知れない。お前の云うことが本当かも知れない。だが何の証拠があるのだ。お前を生かして置いては俺の身が亡ほろびるのだ。よし又、お前は他人に

知らせぬ積り^{つも}でいても、俺の告白を聞いて了った以上、女のお前の腕前では、迎も俺だけの虚勢がはれるものではない。いつとなくお前のそぶりがそれを打開けて了うのだ。どっちにしても、俺はお前を殺す外に方法はないのだ」

「いやです、いやです。私には親があるのです。兄弟があるのです。助けて下さい、後生です。本当に木偶^{でく}の坊^{ぼう}の様に、あなたの云いなり次第になります。離して、離して」

「それ見ろ。お前は命が惜しいのだ。俺の犠牲になる気はないのだ。お前は俺を愛しては
いないのだ。源三郎丈^{だけ}を愛していたのだ。いや、仮令源三郎と同じ顔形の男を愛するこ
とが出来ても、悪人のこの俺丈^{だけ}は、どうしても愛せないのだ。俺は今こそ分った。俺は
どうあつてもお前を殺す外はない」

そして、廣介の両腕は、千代子の肩から徐々に位置を換えて、彼女の首に迫って行くの
でした。

「ワワワワワワ、助けて……」

千代子はもう無我夢中でした。彼女はただ身を逃れることの外は考えなかつたのです。
遠い祖先から受継いだ護身の本能は、彼女をして、ゴリラの様に歯をむかせました。そし
て、殆ど反射的に、彼女の鋭い、犬歯^{けんし}は、廣介の二の腕深く喰い入ったのです。

「畜生ちくしょうッ」

廣介は思わず手をゆるめないではいられませんでした。その隙に、千代子は日頃の彼女からはどうしても想像することの出来ない、す早さで、廣介の腕をくぐり抜けると、恐しい勢で、海豹かいひょうの様に水中を跳ねて、真暗な彼方の岸へと逃れました。

「助けて……」

劈つんざく様な悲鳴が四周あたりの小山に響き渡りました。

「馬鹿、ここは山の中だ。誰が助けに来るものか、昼間の女共は、もうこの地の底の部屋に帰ってぐっすり寐込んでいるだろう。それに、お前は逃げ道さえ知らないのだ」

廣介は態と余裕を見せて、猫の様に彼女へ近寄るのです。地上には何者もないことは、この王国の主あるじである彼にはよく分っていました。少しばかり心配なのは、彼女の悲鳴が、花火の筒を通して、遙かの地下へ伝わりはしないかということでしたが、幸いにも彼女の上陸したのは、その反対側でしたし、又地下の花火打うちあげ上装置のすぐ側には、発電用のエンジンがひどい音を立てていて、滅多に地上の声などが聞える筈はないのです。それにもっと安心なのは、丁度今十幾発目かの花火が打上げられて、さっきの悲鳴はその音の為に、殆ど打消されて了ったことです。

まだ消えやらぬ、こんじき金色の火焰は、あちこちと出口を探して逃げ惑う千代子の痛ましい姿を、まざまざと映し出しています。廣介は一飛びに彼女の身体に飛びついて、そこへ折重なって倒れると、何の苦もなくその首に両手を廻すことが出来ました。そして、彼女が第二の悲鳴を発する前に、彼女の呼吸はもう苦しくなっていたのです。

「どうか許してくれ、俺は今でもお前を愛している。だが俺は余り慾が深いのだ。この島で行われる数々の歓楽を見捨てることが出来ないのだ。お前一人の為に身を亡す訳には行かぬのだ」

果てはぼろぼろと涙をこぼして、廣介は「許してくれ、許してくれ」を連呼しながら、益々固く腕を締めて行きました。彼の身体の下では、肉と肉とを接して、裸体の千代子が、網にかかった魚の様に、ピチピチと躍っているのです。

人工花はなやま山の谷底、あたたかく匂やかな湯気の中で、奇怪なる花火の五色の虹を浴び、ざれ狂う二匹の獣けだものの様に、二人の裸体がもつれ合う。それは恐しい人殺しなんかではなくて、寧ろ酔いしれた男女の裸踊りとも眺められたのです。

追ひ廻す腕、逃げまどう肌、ある時は、密着した頬と頬との間に、鹽しよっぱい涙が混り合ひ、胸と胸とが狂わしき動悸どうきの拍子を合せ、その滝つ瀬のあぶら汗は、二人の身体をなま

この様なドロドロのものに解きほぐして行くかと思えました。

争闘というよりは、遊戯の感じでした。「死の遊戯」というものがあるならば、正しくそれでありましよう。相手の腹にまたがって、その細首をしめつけている廣介も、男のたくましい筋肉の下で、もがきあえいでいる千代子も、いつしか苦痛を忘れ、うつとりとした快感、名状出来ない有頂天に陥って行くのでした。

やがて、千代子の青ざめた指が、断末魔の美しい曲線を描いて、幾度か空を掴み、彼女のすき通った鼻の穴から、糸の様な血のりが、トロトロと流れ出ました。そして、丁度その時、まるで申合せでもした様に、打上げられた花火の、巨大な金色の花弁は、クツキリと黒天鷲絨ビロードの空を区切って、下界の花園や、泉や、そこにもつれ合う二つの肉塊を、ふりそそぐ金粉の中にとじこめて行くのでした。千代子の青白い顔、その上に流れる糸の様に細く、赤漆あかうるしの様につややかな、一筋の血のり、それがどんなに静にも美しく見えたことでしょうか。

人見廣介がT市の菰田邸に帰らなくなつたのは、その日からでした。彼は全くパノラマ国の住人として——この物狂わしき王国の君主として、沖の島に永住することになりました。

「千代子はこのパノラマ国の女王様だ。人間界へは決して二度と姿を見せないだろう。お前はこの島にある群像の国を見ただろうか。時として千代子は、あの目まぐるしく林立した裸体像の一人になりすましていることもあるのだよ。そうでない時には海の底の人魚か、毒蛇の国の蛇使いか、花園に咲き乱れた花の精か、そして、その様な遊びにも飽き果てる、この壮麗な宮殿の奥深く、錦のとばりに包まれた、栄耀栄華えいようえいがの女王様だ。この楽園の生活を、どうして彼女が好まないことがあるう。彼女は丁度昔話の浦島太郎うらしまたろうの様に、時を忘れ、家を忘れてこの国の美しさに陶醉しているのだ。お前方がたはちつとも心配なぞすることは無いのだよ。お前のいとしい主人は、今幸福の絶頂にあるのだから」

千代子の年とつた乳母うばが主人の安否を氣遣つて、態々わざわざ沖の島へ彼女をお迎えにやつて来た時、廣介は、島の地下を穿つて建築した壮麗な宮殿の玉座に坐つて、まるで一国の帝王がその臣下を引見いんけんする様な、おごそかな儀礼を以て、この昔者むかしものの老婆を驚かせました。老婆は廣介の美しい言葉に安堵あんどしたのか、それとも、その場の光景の物々しさにう

たれたのか、返す言葉もなく引下る外はなかつたのです。

凡てがこの調子でありました。千代子の父には重ね重ねの莫大な引出物ひきでもの、その外の親類縁者には、あるものには経済上の圧迫、あるものにはその反対に惜しげもない贈物、それから官辺かんぺんへのつけ届けなども、角田老人の手によって、抜かりなく実行されていたのです。

一方島の人々は、千代子女王の姿を垣間かいま見ることさえ許されませんでした。彼女は昼も夜も、地下の宮殿の奥深く、廣介の居間の裏側の、重いとぼりの蔭にかくれ、何人たりとも、その部屋に入ることを禁ぜられていたのです。でも、主人の異常な嗜好しこうを知っている島の人々は、定めしそのとぼりの奥には、王様と女王様丈けの、歓楽と夢の世界が秘められているのであろうと、ニヤニヤ笑いながら噂し合う位で、誰一人疑いを抱くものともありません。一体島の人達は、数人の男女を除いては、千代子の顔をはっきり見知っている者もなく、ふと行きずりに女王様のお姿を見たところで、それが果して本当の千代子かどうかを見分ける力もなかったのでした。

斯様かようにして、殆ど不可能な事柄がなしとげられたのです。廣介は菰田家の限りなき財力によつて、あらゆる困難に打勝ち、凡ての破綻を取りつくろふことが出来ました。今まで

貧乏だった親類縁者が忽ちにして俄分限となり、みじめだった曲馬団の踊子、活動女優、女歌舞伎達は、この島では日本一の名優の様に好遇され、若い文士、画家、彫刻家、建築師達は、小さな会社の重役程の手当を受けているのです。仮令そこが恐しい罪の国であつたとしても、その人達にどうしてパノラマ島を見捨てる勇氣がありません。

そして、遂に地上の樂園は来たのでした。

類を絶したカーニバルの狂氣が、全島を覆い始めました。花園に咲く裸女の花、湯の池に乱れる人魚の群、消えぬ花火、息づく群像、踊り狂う鋼鉄製の黒怪物、酩酊せる笑い上戸の猛獸共、毒蛇の蛇踊り、その間をねり歩く美女の蓮台、そして、蓮台の上には、錦の衣に包まれたこの国々の王様、人見廣介の物狂わしき笑い顔があるのです。

蓮台は時として、島の中央に完成したコンクリートの大円柱の、それには一面に青い蔦が這い、その間をこれは又鉄の蔦の様な螺旋階が、ネジネジと頂上まで続いているのですが、その螺旋階をよじ昇ることもありません。

そのこの頂上の奇怪な蕈形の傘の上からは、島全体を、遙かなる波打際まで一目に見渡すことが出来たのですが、その眺望の不可思議を何に例えたらよいのでしょうか。下界でのあらゆる風景は、螺旋階を昇ると共に消え去つて、花園も池も森も人も、ただ見る幾

くちようじよ
重 畳の大岩壁と変り、頂上からは、それらの紅がら色の岩壁が丁度一輪の花の各おのお々の花瓣の形で、遙かの波打際まで重なり合つて見えるのです。パノラマ国の旅人は、様々の奇怪な景色の後で、この思いも設けぬ眺望に、又しても一驚を吃しなければなりません。それは例えば、島全体が、大海に漂う一輪の薔薇ばらでありましょうか、巨大なる阿片の夢の真紅の花が、空そらなるおてんとう様と、たった二人で、対等の交際をしているのです。その類たぐいなき単調と巨大とが、どの様に不思議な美しさを醸し出していたか。ある旅人はともすれば彼の遠い遠い祖先が見たであろう所の、かの神話の世界を思い出したかも知れないのですが、……

それらのすばらしい舞台での日夜を分たぬ狂気と淫蕩いんとう、乱舞と陶醉の歓楽境、生死しやうじの遊戯の数々を、作者は如何に語ればよいのでありましょう。それは恐らく、読者諸君のあらゆる悪夢の内、最も荒唐無稽で、最も血みどろで、そして最も瑰麗なるものに、幾分にかよ似通っているのではないかと思われるのですが。

二十四

読者諸君、この一篇のお伽噺は、ここに目出度く大団円を告げるべきでありましょうか。人見廣介の菰田源三郎は、かくして彼の百歳まで、この不可思議なパノラマ国の歓楽に耽り続けることが出来たのでありましょうか。いやいや、そうではなかつたでしょう。古風な物語の癖として、クライマックスの次には、カラストロフィという曲者くせものが、ちゃんと待ち構えていた筈です。

ある日のこと、人見廣介は、ふと、何故なにゆえとも知らぬ不安に襲われたのでした。それは若しかしたら、世に云う勝利者の悲哀であつたかも知れません。絶え間なき歓楽から来た一種の疲労であつたかも知れません、或は又、過去の罪業に対する心の底の恐怖が、ソツと彼のうたた寝の夢を襲つたのであつたかも知れません。併し、その様な理由の外に、ある一人の男が、その男の身边を包む空気と一緒に、ソツとこの島へ持って来た、不思議な凶兆ようちょうとも云うべきものが、或は廣介のこの不安の最大の原因ではなかつたのでしょうか。「オイ君、あの池の側そばにボンヤリ立っている男は、一体誰なのだ。一向見覚えのない男だ
が」

彼は最初その男を、花園の湯の池のほとりに見出しました。そして、側に待はべっていた一人の詩人にこう尋ねたのです。

「御主人は御見忘れになりましたか」詩人が答えて云うのには、「あれは私共と同じ様な文学者なのです。二度目に御傭おやといなすった内の一人なのです。この間暫く国へ帰ったとかで、見かけなかつた様ですが、多分今日の便船で帰って来たのではありますまいか」

「アア、そうだったか。そして、名前は何というのだ」

「北見小五郎とか申しました」

「北見小五郎、私は一向思い出せないが」

その男が不思議に記憶に残っていないことも、何かの凶兆ではなかつたのでしようか。それからというもの、廣介はどこにいても、北見小五郎という文学者の目を感じました。花園の花の中から、湯の池の湯気の向うから、機械の国ではシリンドラーの蔭から、彫像の園では群像の隙間から、森の中の大樹の木蔭から、彼はいつでも廣介の一挙一動を見つめている様に思われました。

そしてある日のこと、かの島の中央の大円柱の蔭で、廣介は余りのことに、遂にその男を捉えたのでした。

「君は北見小五郎とか云ったね、僕が行く所には、いつでも君がいるというの、少しばかりおかしい様に思うのだが」

すると、憂鬱な小学生の様に、ボンヤリと円柱に凭もたれていた相手は、青白い顔を少し赧あからめながら、うやうやしく答えるのです。

「イエ、それはきつと偶然でございました。御主人」

「偶然？ 多分君の云う通りなのであろう。だが、君は今そこで何を考えていたのだね」

「昔読んだ小説のことを考えて居りました。非常に感銘の深い小説でした」

「ホウ、小説？ なる程君は文学者だったね。して、それは誰の何という小説なのだね」

「御主人は多分御存じありますまい。無名作家の、しかも活字にならなかつたものですか。人見廣介という人の『R Aの話』という短篇小説なのです」

廣介は突然昔の名前を呼ばれた位で驚くには、余りに鍛たんれん錬れんを経へていました。彼は相手の意外な言葉に、顔の筋一つ動かさないうで、そればかりか、はからずも、彼の昔の作物さくぶつの愛読者を見出した、不思議な喜びをさえ感じながら、懐しく言葉を続けるのであります。

「人見廣介、知っているよ。お伽噺お伽噺の様な小説を書く男であつたが、あれは君、僕の学生時代の友達なのだよ。友達といつても、親しく話したこともないのだけれど。だが、『R Aの話』というのは読まなかつた。君はどうしてその原稿を手に入れたのだね」

「そうですか、では御主人のお友達だったのですか。不思議なこともあるものですね。

『R Aの話』は一九——年に書かれたのですが、その頃は御主人はもうT市の方へ御帰りなすつていたのでしょね」

「帰っていた。その二年ばかり前に分れた切り、人見とはすつかり御無沙汰ごぶさたになっている。だから、彼が小説を書き出したことも、雑誌の広告で知った位なのだよ」

「では、学生時代にも余りお親しい方ほうではなかったのですか」

「まあそうだね。教室で顔を合せば挨拶を交す程度の間柄だった」

「私はこちらへ来るまで、東京のK雑誌の編輯局にいたのです。その関係から人見さんとも知合いになり、未発表の原稿も読んでいる訳ですが、この『R Aの話』というのは私などは実に傑作だと思つていられるのですけれど、編輯長が余りに濃艶な描写を氣遣つて、つい握りつぶしてしまつたのです。それというのが、人見さんはまだ駈け出しの、名もない作者だつたものですから」

「それはおいしいことだつたね。して、人見廣介はこの頃ではなにをしているかしら」

廣介は「この島へ呼んでやつてもいいのだが」とつけ加えたいのを、やつと我慢したのです。それ程彼は、彼自身の旧惡については、自信があり、真しんから菰田源三郎になり切つ

ているのでした。

「まだ御存じないと見えますね」北見小五郎は感慨深く云うのです。「あの人は昨年自殺をしてしまったのです」

「ホウ、自殺を？」

「海へはまって死んだのです。遺書があつたので自殺ということが分かりました」

「何かあつたのだね」

「多分そうでしょう。私には分かりませんが。……それにしても、不思議なのは、御主人と人見さんと、まるで双児ふたごの様によく似ていることです。私は始めてこちらへ参った時、若しや人見さんがこんな所に隠れていたのではないかとびっくりした程でした。無論御主人もそのことは御気づきでしょうね」

「よくひやかされたものだよ。神様がとんだいたずらをなさるものだから」

廣介はさもいらくに笑って見せました。北見小五郎も、それにつれて、おかしくてたまらぬ様に笑いました。

その日は空が一面に鼠色の雨雲に覆われ、嵐の前といった、いやに静な、ソヨリとも風のない、それでいて島のまわりには、波が獣のうなり声で、不気味に泡立っている様な天

候でした。

影のない大円柱は、低い黒雲への、悪魔のきざはしの様に、そそり立って、五いつか抱えもあるその根本の所に、小さな二人の人間が、しよんぼりと話し合っていました。いつもは裸女の蓮台に乗るか、そうでなければ数人の召使を引きつけている廣介が、この日に限って一人ぼっちでここへ来たのも、一やといにん傭人に過ぎない北見小五郎と、こんな長話を始めたのも、不思議と云えば不思議でした。

「本当に、まるで瓜二つです。それに、似ていると云えば、まだ妙なことがあるのです」
北見小五郎は、段々ねばり強く話込んで来るのでした。

「妙なとは？」

廣介も、何かこのまま分れてしまう気にはなれないのです。

「今の『RAの話』という小説がです。ですが、御主人は若しや、人見さんから、その小説の筋の様なものをお聞きなすつたことはないのでしょうか」

「イヤ、そんなことはない。さつきも云う通り、人見とはただ学校が同じだったに過ぎない。つまり教室での知合いなのだから、一度だって深く話し合ったことなんかありやしないのだよ」

「本当でしょうか」

「君は妙な男だね。僕が嘘を云う訳もないではないか」

「ですが、あなたはそんな風に云切っておしまいなすっていいのでしょうか。若しや後悔なさる様なことはありませんまいか」

この北見の異様な忠告を聞くと、廣介は何かしらゾツとしないではいられませんでしたが、それが何であるか、分り切ったことを胸忘れた様で、不思議と思ひ出せないのです。

「君は一体何を……」

廣介は云いさして、ふと口をつぐみました。ぼんやりと、ある事が分りかけて来たのです。彼の顔は青ざめ、呼吸はせわしくなり、脇の下に冷いものが流れました。

「ソラね、少しずつお分りでしょう。私という男が何の為にこの島へやって来たかが」

「分らない、君のいうことは少しも分らない。狂気めいた話は止よにしてくれ給え」

そして廣介は又笑いました。併しそれはまるで幽霊の笑い声の様に力のないものでした。「お分りにならないければ、お話ししましょう」北見は少しずつ召使の節度を失って行く様に見えました。「『R Aの話』という小説の幾つかの場面とこの島の景色とが、どこからど

これまで、全く同じだということです。それは丁度あなたが人見さんに生写しである様に、生写しなのです。若しあなたが人見さんの小説も読まず、話も聞いていらっしやらぬとしたら、この不思議な一致はどうして起つたのでしょうか。暗合というには余りに一致しているのです。このパノラマ島の創作は、『R Aの話』の作者と寸違たがわぬ思想と興味を持った人でなくては出来ないのです。いくらあなたと人見さんと顔形が似ていると、思想まで全然同一だとは余り不思議ではありませんか。私は今それを考えていたのですよ」

「それで、どうだということです」

廣介は呼吸をつめて相手の顔を睨みつけました。

「まだお分りになりませんか。つまりあなたは菰田源三郎でなくて、その人見廣介に相違ないということです。若しあなたが『R Aの話』を読んでいるとか聞いているかしたならば、それを真似てこの島の景色を作ったと云いのがれるすべもあつたでしょう。ところがあなたは今、そのたった一つの逃れ道を御自分でふさいでおしまいなすつたではありませんか」

廣介は相手の巧みなわなにかかつたことを悟りました。彼はこの大事業に着手する前、一応自作の小説類を点検して、別段禍をわざわい残す様なものないことを確認して置いたのですが、握りつぶしになつた投書原稿のことまでは気づかなかつたのです。「R Aの話」なんてい

う小説を書いたことすら殆ど忘れていた位です。この物語の最初にも述べた様に、彼は書く原稿も書く原稿も大抵は握りつぶしにされた様な、哀れな著述家であったのですから。

が、今北見の言葉によつて思い出せば、彼は確にその様な小説を書いていました。人工風景の創作ということは、彼の多年の夢であつたのですから、その夢が一方では小説となり、一方ではその小説と寸分違わぬ実物として現れたとて、少しも不思議はないのでした。あれ程考えに考えた彼の計画にも、やっぱり手抜きがあつたのです。それが物もあろうに没書になつた原稿だつたとは。彼は悔んでも悔み足りぬ思いでした。

「アア、もう駄目だ。とうとうこいつの為に正体を見^{みあらわ}現されたかも知れない。だが、待てよ。こいつの握っているのはたかが一篇の小説じやあないか。まだへこたれるには少し早いぞ。この島の景色が他人の小説に似ていたとて、何も犯罪の証拠にはならないのだから」

廣介は咄嗟の間に、心を定めて、ゆったりした態度を取返すことが出来ました。

「ハハハハ……、君もつまらない苦勞をする男だね。僕が人見廣介だつて？ 十二人見廣介だつて一向構いはしないが、どうも僕は菰田源三郎に相違ないのだから、致^{いたしかた}方がないね」

「イヤ、私の握っている証拠がそれ丈けだと思つては、大間違いですよ。私は何もかも知つてゐる。知つてはいるのだけれど、あなた自身の口から白状させる為に、こんな廻りくどい方法とを採つたのです。いきなり警察沙汰なんかにしたくない理由わけがあつたものですか。という訳は、私はあなたの芸術には心から敬服してゐるのです。いくら東小路伯爵夫人のお頼みだからといって、この偉大な天才を、むぎむぎ浮世うつきよの法律なんかにかかせるくないからです」

「すると、君は東小路からの廻し者なんだね」

廣介はやつと意味を悟ることが出来ました。源三郎の妹のついでに東小路伯爵というのは、数多あまたの親族うちの中で、金銭の力で自由に出来ない、たった一人の例外だったのです。北見小五郎はその東小路夫人の手先の者に相違ありません。

「そうです。私は東小路夫人の御依頼によつて来てゐるものです。日頃お国ほの方とは殆ど御交際のない東小路夫人が、遠くからあなたの行動を監視なすつていたとは、あなたにしても意外でしょうね」

「イヤ、妹が僕にとんでもない疑いをかけているのが意外だよ。逢つて話して見ればすぐ分ることなんだが」

「そんなことをおっしゃった所で、今更ら何の甲斐があるものですか。『R Aの話』は私
 があなたを疑い始めたほんのきつかけに過ぎないので、本当の証拠は外ほかにあるのですから」
 「では、それを聞こうではないか」

「例えばですね」

「例えば？」

「例えば、このコンクリートの壁にくっついている一本の髪の毛ですよ」

北見小五郎はそういつて、かたわらの大円柱の表面の蔦を分けて、その間に見える白い
 地肌から、優曇華うとんげの様に生えている、一本の長い髪の毛を見せました。

「あなたは多分、これが何を意味するか御承知でしょうね。……、オット、それはいけま
 せん。あなたの指が引金にかからぬ先に、ごらんなさい。私の弾が飛び出しますよ」

北見はそういつて、右手に持った光るものをさしつけました。廣介はポケットに手を入
 れたまま化石した様に、動けないのです。

「私はこの間から、この一本の髪の毛について考えつづけていたのです。そして、今あな
 たとお話ししている間に、やっと真相にふれることが出来ました。この髪の毛は一本丈け
 放れたものでなくて、奥の方で何かに続いているということを確認することが出来たのです。

では今それをためして見ましようか」

北見小五郎は云うかと思うと、やにわにポケットから大形のジャック・ナイフを取り出して、髪の毛の下のあたりを目がけて、力まかせに突き立て突き立てしたのです。するとコンクリートがバラバラとこぼれて、やがて巖乗な刃物が半ばもかくれたかと思うと、その刃先を伝って、真赤な液体がタラタラと流れ出し、見るまに白いコンクリートの表面にあざやかな一輪の牡丹の花が咲いたのです。

「掘り返して見るまでもありません。この柱には人間の死体が隠してあるのです。あなたの、いや菰田源三郎氏の夫人の死体が」

幽霊の様に青ざめて、今にもそこへ坐り相な廣介を、片手で抱きとめながら、北見は普通の調子で続けました。

「無論私はこの一本の髪の毛から凡てのことを推察した訳ではありません。人見廣介が菰田源三郎になりすます為には、菰田夫人の存在が最大の障礙に相違ない、という点に気がついたのです。それであなたと夫人の間柄を注意深く観察している内に、ふと夫人の姿が我々の眼界から消えてしまう様なことが起りました。他の人はだましおおせても私をだますことは出来ません。これはてつきりあなたが夫人を殺害なすつたに相違ないと考え

たのです。殺害したからには死体の隠し場所がある筈です。あなたのような場所をお選びなさるでしょうね。ところで、私にとって好都合だったのは、これもあなたは忘れなすっているかも知れませんが、『RAの話』にその隠し場所がちゃんと暗示されてあったのです。あの小説にはRAという男が彼のアブノルマルな好みから、コンクリートの大円柱を立てる際に、昔の橋はし普請ふしんなどの伝説を真似て、（小説のことですから人を殺すのは自由自在です）必要もないのにそのコンクリートの中へ、一人の女を人柱ひとばしらとして生埋めにすることが書いてありました。若しやと思つて、夫人がこの島へ来られた日にくつて見ますと、丁度この円柱の板いた囲がこいが出来上つて、セメントを流し込み始めた頃であつたことが分りました。実に安全な隠し場所ですね。あなたはただ、人のいない時を見はからつて、足場の上まで死体を抱き上げ、板囲の中へ落し込み、その上から二三杯のセメントを流して置きさえすればよかつたのですから。ですが、夫人の髪の毛が一本丈けコンクリートの外へもつれ出していたというのは、犯罪には何かしら思わぬ行違ひが出来るものではありませんか」

もう廣介は、他愛もなくくずおれて、円柱の丁度千代子の血潮のあたりに凭れかかつていました。北見小五郎は、そのみじめな有様を、気の毒そうに眺めながら、でも考えてい

た丈けのことは云つてしまふ積りでした。

「それを逆にしますと、つまりあなたが夫人を殺害しなければならなかったということは、とりも直さずあなたが菰田源三郎ではなかったことです。分りますか。この夫人の死体がさつき云つた証拠の一つなのです。無論それだけではありません。私はもう一つ最も重大な証拠を握つて居ります。多分もう御分りだと思ひますが、それは外でもない菰田家の菩提寺の墓場にあるのです。人々は菰田氏の墓場から死骸が消えうせ、別の場所に菰田氏とそつくりの生きた人間が現れたのを見て、忽ち菰田氏たちまが蘇生したものと信じ切つてしまひました。ですが、棺桶の中から死体がなくなつたといつて、必ずしもその死体が甦つたとは極められません。死体は外ほかの場所へ運ばれているかも知れないからです。外の場所、それは最も手近な所に幾つとも棺桶が埋めてあるのですから、死体を運び出した者がそれをどこかへ隠そうとするなら、そのお隣の棺桶ほど屈くつきよう 竟きやうの場所はありません。何とうまい手品ではありませんか。菰田源三郎の墓の隣には源三郎の祖父に当る人の棺が埋めてあるのですが、そこには今、あなたの思おも遣いやりのあるはからいで、お爺じいさんと孫とが、骨と骨とで抱合つて、仲よく眠つて居るのですよ」

北見小五郎がそこまで話し進んだ時、くずおれていた人見廣介は、突然がぼとはね起き

て、薄気味悪く笑い出すのでした。

「ハハハ……、イヤ、君はよくも調べ上げましたね。その通りです。寸分間違った所はありません。だが、実をいうと、君の様な名探偵を煩わすまでもなく、僕はもう破滅に瀕していたのですよ。遅いか早いかの違いがあるばかりです。一時は僕もハツとして、君に向おうとまでしましたが、考え直して見ると、そんなことをした所で、僅か半月か一月今の歡樂を延すことが出来る丈けです。それが何でしょう。僕はもう作りたい丈けのものを作り、しただけのことをしました。思い残す所はありません。いさぎよく元の人見廣介に返つて、君の指図に従いましょう。打開けますと、さすがの菰田家の資産も、あとやつと一月この生活をささえる程しか残っていないのですよ。併し、君はさつき、僕みたいな男を、むぎむぎ浮世の法律に裁かせたくないとか云われた様でしたね。あれはどういう意味なんでしょうか」

「有難う。それを伺つて私も本望です。……あの意味ですか、それは、警察なんかの手を借りないで、いさぎよく処決して頂き度いということですよ。これは東小路伯爵夫人のいいつけではありません。やはり、芸術につかえる一人の僕として、私一個人の願ひなのですから」

「有難う。僕からも御礼を云わせて下さい。では、暫く僕を自由にさせて置いて下さるでしょうか。ほんの十分ばかりでいいのですが」

「よろしいとも、島には数百人のあなたの召使がいますけれど、あなたを恐しい犯罪者と知ったなら、まさか味方をする訳もないでしょうし、又味方をかり集めて、私との約束を反故ほごになさるあなたでもありますまい。では、私はどこにお待ちしていればよいのでしょうか」

「花園の湯の池の所で」

廣介は云い捨てて、大円柱の向側に見えなくなってしまうました。

二十五

それから十分ばかり後、北見小五郎は、数多あまたの裸女達に混って、湯の池の、におやかな湯気の中に半身を浸して、のどかな気持で、廣介の来るのを待ち受けていました。

空はやつぱり一面の黒雲に覆われ、風はなし、目路めじの限りの花の山は、銀鼠ぎんねずみ色いろに眠つて、湯の池さざなみに漣も立たず、そこにゆあみする数十人の裸女の群さえ、まるで死んだ様に

おし黙っているのです。北見の目には、その全体の景色が、何か憂鬱な天然の押絵の様にも見えたことでした。

そして十分二十分と過ぎて行く間が、どの様に長々しく感じられたことでしょうか。いつまでも動かぬ空、花の山、池、裸女の群、そして、それらをこめた夢の様な鼠色。

併し、やがて、人々は、池の片隅から打上げられた、時ならぬ花火の音に、ハツと我に返り、次の瞬間空を見上げて、そこに咲き出でた光の花の余りの美しさに、再び感嘆の叫びを上げないではいられませんでした。

それは、常の花火の五倍程の大ききで、それ故殆ど空一杯に拡がって、一つの花というよりは、あらゆる花を集めて一輪にした様な、五色の花瓣が、丁度万花鏡の感じで、下るに随つて、ハラハラとその色と形を換えながら、なおも広く広くと拡がって行くのでした。夜の花火でもなく、そうかといつて昼の花火とも違い、黒雲と銀鼠色の背景に、五色の光が怪しき艶消しとなつて、それが、刻一刻面積を広めながら、ジリジリと釣天井の様に下つて来る有様は、真実魂も消えるばかりの眺めでした。

その時、北見小五郎は、くらめく様な五色の光の下で、ふと数人の裸女の顔に、或は肩に、紅色の飛沫ひまつを見たのです。最初は湯気のしづくに花火の色が映つたのかと、そのまま

見すごしていたのですが、やがて、紅の飛沫は益々はげしく降りそそぎ、彼自身の額や頬にも、異様の暖かなしたたりを感じて、それを手にうつして見れば、まがう方なき紅のしずく、人の血潮に相違ないのでした。そして、彼の目の前の湯の表に、フワフワと漂うものを、よく見れば、それは無慙むじんに引き裂かれた人間の手首が、いつのまにかそこへ降つていたのです。

北見小五郎は、その様な血ちなまぐさ腥せきい光景の中で、不思議に騒がぬ裸女達をいぶかりながら、彼も又そのまま動くでもなく、池の畔くろにじつと頭をもたせて、ぼんやりと、彼の胸の辺あたりに漂っている、生々しい手首の花を開いた真赤な切口に見入りました。

か様にして、人見廣介の五体は、花火と共に、粉こなみじん微塵にくだけ、彼の創造したパノラマ国の、各々の景色の隅々までも、血液と肉塊の雨となつて、降りそそいだのでありました。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第2巻 パノラマ島綺譚」光文社文庫、光文社

2004（平成16）年8月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第七巻」春陽堂

1927（昭和2）年3月20日発行

初出：「新青年」博文館

1926（大正15）年10月～1927（昭和2）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「パノラマ島奇譚」です。

※誤植を疑った箇所を、「創作探偵小説集第七巻」春陽堂、1927（昭和2）年3月20日発行の表記にそって、あらためました。

入力：砂場清隆

校正：まつもこ

2016年3月4日作成

2016年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

パノラマ島綺譚

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>